

第九章 銀行ハ官廳ノ爲換方ニ從事スルヲ及ヒ外國
銀行ト聯合スヘカテサル事ヲ明カニス

第八十一條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ其通常營業事務ノ
外大藏卿ノ命令ニ依リ大藏省又ハ各地方官廳其他ノ爲
換方ヲ勤ムルヲ得ヘシ尤其勤方ノ手續ハ爾時大藏卿
ノ考案ニヨリ其筋ヨリ命スル所ノ規定ヲ奉シテ以テ之
ニ從事スヘシ

第八十二條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ大藏卿ノ命令ヲ奉
スルカ或ハ其免許ヲ得ルニ非レハ内外地ニ設置スル所
ノ外國ノ行銀ハ勿論本邦ノ銀行(又ハ交換所等)ト雖モ
凡ソ海外ニアルモノト相共ニ聯合シ以テ爲換ヲ取組ミ
又ハ其他ノ營業ニ從事スルヲ得サルヘシ

第十章 銀行役員職務上一般ノ制禁及ヒ其負責ノ事
ヲ明カニス

第八十三條 十六年五月第十四號 國立銀行ノ役員タル者諸
相場ニ關シ投機ノ商業ニ從事シ危險ナリト認ムルトキ
ハ大藏卿ハ銀行ニ命シ其役員ヲ退職セシムルコトアル
ヘシ

第八十四條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ頭取々締役等若シ
此條例ニ背戻スルヲアリテ夫レカ爲メ株主又ハ其他ノ
人へ損失ヲ受ケシムルハ其損失ハ頭取々締役等之ヲ
償辦スルノ責ニ任スヘシ

第八十五條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ頭取取締役支配人
其他ノ役員タル者ハ銀行所有ノ金銀及ヒ諸証書預リ品
等ヲ私用シ又ハ竊掠シ又ハ之ヲ妄用スヘカラス又頭取
取締役ノ承認ヲ得スシテ銀行紙幣及ヒ預リ證書ヲ發行
シ又ハ諸貸附ヲナシ爲換手形ヲ振出シ又ハ證書及ヒ切
手ノ引受ケヲ爲シ約束手形爲換手形諸證書質物及ヒ公

裁ニテ引取リタルモノヲ賣渡スヘカラス又銀行ノ諸簿冊計表報告書其他ノ要書ニ詐偽ヲ記載スヘカラス○若シ右ノ箇條ヲ犯シテ其銀行又ハ他ノ銀行會社其他ノ者ヲ損害欺騙シ又ハ其銀行ノ役員或ハ検査官員ヲ欺カント謀ル者ハ皆ナ國法ニ從テ之ヲ罰スヘシ

第八十六條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ頭取取締役支配人其他ノ役員ハ社中申合規則ノ規定ニ從ヒ尋常借り得ヘキ金額ノ外ハ自身又ハ仲人等ヲ以テ一切銀行ヨリ借受クヘカラス又其銀行ヨリ借財チナス者ノ爲メ其證人又ハ受人トナルヘカラス○若シ右等ノ役員右ノ規定ニ背戻シテ借財チナシ又ハ證人受人トナリ又ハ人ヲシテ之ヲ爲サシメ又ハ之ヲ承諾スル等ノ事アルキハ此等ノ役員八十圓ヨリ少ナカラス五十圓ヨリ多カラサル罰金ヲ納ムヘシ且其借財ノ金額ハ其規定ニ背戻セシ者ヨリ速

カニ銀行ヘ返済スヘシ

第八十七條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ頭取取締役支配人其他ノ役員タル者ハ其銀行ノ名ヲ假リ以テ自己ノ利益ヲ謀ルハ勿論總テ私用ヲ辨スヘカラス若シ此等ノ役員之ヲ犯シ又ハ人ヲシテ犯サシメ又ハ知テ之ヲ見逃ス者ハ皆ナ國法ニ從テ之ヲ罰スヘシ

第十一章 紙幣及ヒ諸手形類ノ發行並ニ銀行紙幣ノ價造描改及ヒ其版彫刻等禁止ノ事ヲ明カニス

第八十八條 此條例ヲ遵奉シテ創立シタル國立銀行ヲ除クノ外何人又ハ何會社ヲ論セス凡テ紙幣又ハ右望次第持參人ヘ仕拂フヘキ約束手形又ハ類似ノ證書其他政府發行ノ貨幣同様ニ通用スヘキ諸手形又ハ切手ヲ振出シ其引受チナシ之ヲ製シ之ヲ發行スルヲ禁ス若シ此等ノ數件ヲ犯ス者アルニ於テハ何人ヲ論セス皆ナ國法ニ從

テ之ヲ罰スヘシ

第八十九條 此條例ヲ遵奉スル國立銀行ヨリ發行スル銀行紙幣ハ何人ヲ論セス之ヲ贋造スヘカラス贋造セシムヘカラス贋造スルヲ助ケ又ハ之ヲ勸ムヘカラス贋造ト知リテ之ヲ通用スヘカラス又ハ之ヲ通用セシムヘカラス又其文字畫圖ヲ描改スヘカラス描改セシムヘカラス描改スルヲ助ケ又ハ之ヲ勸ムヘカラス描改セシ紙幣ト知リテ之ヲ通用スヘカラス又ハ之ヲ通用セシムヘカラス

第九十條 右銀行紙幣ヲ印刷スルニ用ウル所ノ版板又ハ之ニ類似スル者ハ之ヲ私ニ彫刻スヘカラス又ハ私ニ彫刻ヲ命スヘカラス又右銀行紙幣ニ用ウル所ノ紙品又ハ之ニ類似スル紙品ハ之ヲ私ニ製スヘカラス又ハ人ヲシテ之ヲ製セシムヘカラス又ハ之ヲ私ニ所持スヘカラス

若シ前第八十九條及ヒ本條ノ數件ヲ犯ス者アルニ於テハ皆テ國法ニ從テ之ヲ罰スヘシ

第九十一條 此條例ヲ遵奉スル銀行ヨリ發行シタル銀行紙幣又ハ爲換手形約束手形其他証書ノ類ハ何人ニ限ラス之ヲ切抜キ又ハ切裂キ又ハ剝去リ又ハ塗抹シ又ハ孔ヲ穿チ又ハ糊付ニスル等ノ一チナスヘカラス又ハ人ヲシテ此等ノ事ヲナサシムヘカラス若シ此等ノ數件ヲ犯ス者アルハ其裁判所(又ハ府縣ノ聽斷主任官員)ニ於テ之ヲ裁判シ其金高十倍ノ償金ヲ銀行ヘ拂ハシムヘシ
(明治十六年五月第十四号布告ニテ改正)

第十二章 官命鎖店ノ場合特監督役跡引受人等ノ取扱方並ニ公債證書ノ没入及ヒ紙幣引換等ノ手續ヲ明カニス

第九十二條 十六年五月第十四号布告ニテ削除

第九十三條 十六年五月第十四號布告ニテ改正 國立銀行ニ於テ左ニ掲ク

ル事實アルトキハ大藏卿ハ鎖店ヲ命スルコトアルヘシ

第一 國立銀行條例ノ旨趣又ハ箇條ニ背戻シ大藏卿

其銀行ヲ鎖店セシムルヲ相當ナリト思考スルトキ

第二 國立銀行ニ於テ負債弁償ノ義務ヲ盡ス能ハサ

ル證據アルトキ

第三 國立銀行ニ於テ其資本金總額十分ノ五以上ノ

損失ヲ生スルトキ

第九十四條 第九十三條ト前條ニ記載スル事實アリト認

ムルトキハ大藏卿ハ檢査ノ官員ヲ派遣シ其事實ヲ推糺

セシメ若シ相違ナキニ於テハ都テ其銀行ノ營業ヲ差止

金銀其他ノ出納ヲ禁スヘシ

第九十五條 前條ノ如ク營業ヲ差止メラレタル銀行ノ頭

取取締役支配人其他役員ハ諸手形諸證書類又ハ抵當物

地所等ヲ他人ヘ譲リ渡シ又ハ賣渡スヘカラス又他人ヨ

リ金銀其他ノ物件ヲ預ルヘカラス若シ頭取取締役支配

人其他ノ役員等此箇條ニ背キ或ハ譲リ渡シ又ハ賣渡シ

又ハ預リ又ハ拂方ノ引受ヲナスコトアルニ於テハ紙幣頭

ハ督促シテ其金額ヲ償ハシメ之ヲ其元ニ復セシムヘシ

第九十六條 紙幣頭ハ更ニ大藏卿ヘ稟議シ特例ノ監督役

ヲ命遣シ其銀行ノ實際諸般ノ取扱ヲ推究シテ其事實ヲ

詳明ニ報知セシムヘシ而シテ其背戻ノ事實相違ナキニ

於テハ紙幣頭ハ其銀行ヨリ出納寮ニ預ケ置キタル公債

證書ヲ没入スヘキ旨ヲ(右報知ヲ得タル日ヨリ三十日

以內ニ)申渡シ其公債證書ヲ取上クヘシ

第九十七條 右諸般ノ手續了リシ後ヲ紙幣頭ハ大藏卿ヘ

ノ稟議ヲ經テ凡ソ此銀行ノ紙幣ヲ所持スルモノハ都テ

之ヲ大藏省ニ出シテ其引換ヲ乞フヘキ旨ヲ公告シ相當

ノ時日ヲ以テ之ヲ引換遣ハスヘシ而シテ其引換タル紙幣ハ總テ此條例第五十一條ノ手續ニ從ヒ之ヲ燒捨テ其趣ヲ新聞紙其他ノ手續ヲ以テ世上ニ公告スヘシ

第九十八條 十六年五月第十四号布告ニテ改正 此條例第九十六條ニ據リ

其銀行ヨリ没入シタル公債證書ハ大藏省ノ便宜ニ從ヒ之ヲ公賣若クハ私賣シ以テ其銀行ノ發行紙幣引換ノ資ニ充ルモノトス但右公債證書ノ賣却代價紙幣下付高ニ對シ不足アルトキハ大藏卿ハ他ノ債主ニ先チ之ヲ其銀行ノ資産ヨリ徵収シ若シ下付高ニ對シ過剩アルトキハ之ヲ其銀行ニ下付スヘシ

第九十九條 此條例第九十六條ニ掲グル所ノ特例監督役ノ報知ヲ得之カ處分ヲナスニ於テハ紙幣頭ハ即チ右銀行ノ跡引受人ヲ命シ其銀行ノ諸簿冊及ヒ各種ノ資産等ヲ取押ヘ諸貸附金立替金ヲ取立テタル上ニテ其裁判所

(又ハ府縣ノ聽斷主任官員)ニ謀リテ滞リ貸金額及ヒ銀行ノ所有物ヲ賣拂ヒ其集合金ヲ以テ其銀行ノ諸借財又ハ預リ金其外ヲ償却シ過金アレハ株高ニ應シテ之ヲ株主ヘ割返シ不足アレハ都テ銀行ノ株高及ヒ其所有物ヲ限リテ相當ノ分散ヲナサシムヘシ

第一百條 右借財又ハ預リ金等ヲ償却スルニハ紙幣頭ヨリ新聞紙其他ノ手續ヲ以テ三箇月間世上ニ公告シ其銀行ニ貸金預ケ金等アルモノハ右時限中ニ申出テシメ其事由ト証書類トヲ檢按シ紙幣頭ハ厚ク之ニ注意シ適正ノ處分ヲ以テ貸方ニ賦當償却スヘシ

第一百一條 此條例ヲ遵奉スル國立銀行ノ株主等ハ假令ヒ其銀行ニ損失又ハ其他ノ事故アリテ其銀行鎖店分散スルコトアルトモ其株主等ハ其創立證書ニ於テ掲載シタル株式金額ノミ損失スルノ外其鎖店分散ニ付テ別ニ賦

當出金ヲ受クルノ責メ勿カルヘシ

第二百二條 紙幣頭ハ此條例第九十六條ニ掲クル所ノ處分ヲナスニ際シ其銀行ヨリ尙ホ請願スルコトアリテ其狀實ヲ具陳スル時ハ監督役ヲ出セシヨリ三十日以内(郵便遞送日數ヲ除ク)ナラハ其地方管廳ニ謀リ更ニ其實況ヲ詳悉シテ全ク其背戻セサルノ實證アルニ於テハ紙幣頭ハ之ヲ大藏卿へ稟議シ而シテ之ヲ宥恕スヘシ尤右ノ請願書ハ必ス其地方管廳ヲ經テ之ヲ紙幣頭へ差出スヘシ

但シ此宥恕ヲナス時ハ紙幣頭ハ速カニ其趣ヲ出張ノ監督役ニ達シテ暫ラク其處置ニ取掛ルコトヲ見合セシムヘシ

第二百三條 十六年五月第十四号布告ニテ改正 此條例ヲ遵奉スル銀行鎖店ノ場合ニ於テ跡引受人ノ入費等ハ都テ相當ノ處分ヲ以

テ大藏卿之ヲ取極メ他ノ債主ニ先チ其銀行ノ資産ヨリ之ヲ辨償セシムヘシ

第十三章 銀行平穩鎖店ノ手續及其紙幣引換方等ノ事ヲ明カニス

第二百四條 此條例ヲ遵奉スル銀行三分二以上ノ株主等ノ協議ニ從テ平穩ニ分散又ハ鎖店セントスルニハ其銀行ノ頭取支配人ヨリ其銀行ノ名印ヲ以テ其決議ノ旨趣ヲ紙幣頭ニ申牒シ其承諾ヲ得テ後チ三箇月間新聞紙其他ノ手續ヲ以テ世上ニ公告シ發行紙幣ノ引換方其他銀行ニ屬スル取引ノ清算ヲ詳載シタル報告ヲ製シテ之ヲ世上ニ公告スヘシ

第二百五條 右ノ公告ヲナシタル日ヨリ其銀行ハ其引換ヘタル銀行紙幣ヲ以テ豫テ出納寮ニ預ケ置キタル公債証書ノ内ヲ取戻ストテ得ヘシ尤其公告ノ日ヨリ半箇年ヲ

過キ其銀行ノ簿冊上ニ於テ尙ホ世上ニ殘在スル銀行紙幣アルニ於テハ其員額丈ケノ通貨ヲ出納頭ニ差出シ右預ケ置キタル公債証書ノ全額ヲ取戻スヲ得ヘシ然ル上ハ其銀行紙幣ノ世上ニ殘在スル分ハ大藏省ニ於テ之ヲ引換ヘ銀行ノ株主得ハ一切其引換ノ責ニ任セサルヘシ

第六六條 右鎮店シタル銀行ヨリ其殘在銀行紙幣引換ノタメ通貨ヲ差出スニ於テハ出納頭ハ之ヲ領受シ其趣ヲ詳記シタル受取証書ヲ製シ之ヲ其銀行ヘ下付スヘシ但シ出納頭ハ右受取証書ノ外ニ預リ証書ヲ製シテ之ヲ紙幣頭ヘ回附シ置キ其殘在銀行紙幣引換ノ爲メ右通貨ノ受取方ヲ要スルニ於テハ何時ニテモ之ヲ紙幣頭ヘ渡スヘシ

第六七條 右預リ証書ヲ領受スルニ於テハ紙幣頭ハ大藏卿ノ稟議ヲ經テ相當ノ期限ヲ定メ新聞紙其他ノ手續ヲ以テ之ヲ世上ニ公告シ其殘在銀行紙幣ノ引換方ニ從事スヘシ

第六八條 右ノ手續ヲ以テ引換タル銀行紙幣ハ此條例第五十一條ノ規定ニ從テ之ヲ燒捨シ其趣ヲ世上ニ公告スヘシ尤右ニ屬スル諸計算其外トモ紙幣頭國債頭出納頭ハ各其簿冊ニ詳記シ置クヘシ

第十四章 銀行訴訟ノ取扱及罰金處分ノ事ヲ明ニス
第六九條 此條例ヲ遵奉シテ創立シタル銀行若シ他ノ會社又ハ一般ノ人民ヲ相手取り訴訟スルカ又ハ他ヨリ此銀行ヲ相手取り訴訟セラル、カノキハ都テ一般ノ訴訟法ニ從ヒ其裁判所(又ハ府縣ノ聽斷主任官員)之ヲ裁判處分スヘシ

第七十條 此條例ニ於テ規定セル罰金ヲ以テ處置スヘキ

罪科ニ付テハ裁判所(又ハ府縣ノ聽斷主任官員)之ヲ裁
判處分スヘシ但シ此條例中現ニ罰金ノ明文無キ箇條ヲ
犯スコアルキハ其時ニ當リ其裁判所(又ハ府縣ノ聽斷
主任官員)ニ於テ相當ト思考スル罰金(三圓ヨリ少ナ
カラス五拾圓ヨリ多カラサル額數)ヲ右犯罪ノ銀行又
ハ頭取々締役其他ノ役員ニ命スヘシ

第十五章 銀行納税ノ事ヲ明カニス

第百十一條 此條例ヲ遵奉シテ創立シタル銀行ハ追テ政
府ニ於テ制定施行スル所ノ收税規則ニ遵ヒ相當ノ税金
ヲ納ムヘシ

(十六年五月第十四号布告ニテ本章ヲ改正)

第十六章 銀行紙幣消却ノ方法ヲ明カニス

第百十二條 此條例ヲ遵奉スル國立銀行ヨリ發行シタル
紙幣ハ左ニ掲クル方法ヲ以テ其營業年限内ニ悉皆消却

スヘキモノトス但其取扱手續ハ大藏卿之ヲ定メ日本銀
行ヲシテ之ニ從事セシムヘシ

一 各國立銀行ノ紙幣引換準備金ハ大藏卿ノ指定スル期限
迄ニ日本銀行ニ納付シ營業年限内之ヲ預ケトナシ紙幣
消却ノ元資ニ充ツヘシ

一 各國立銀行ハ每半季利益ノ多少ニ拘ラス其銀行紙幣下
付高ニ對シ年二分五厘(即チ半季一分二厘五毛)ニ當ル
金額ヲ引去リ之ヲ日本銀行ニ預ケテ紙幣消却ノ元資ニ
充ツヘシ

一 日本銀行ハ前二項ニ掲グル金額ヲ預リ各國立銀行ト別
段ノ約定ヲ結ヒ之カ發行紙幣ヲ消却シテ大藏省ニ上納
スルモノトス但其約定書ハ大藏卿ニ呈シテ之カ奥書證
印ヲ受クヘシ

一 日本銀行ヨリ右消却紙幣ヲ上納シタルトキハ大藏省ニ

於テ此條例第五十一條ノ手續ニ從ヒ之ヲ燒捨テ其都度
之ヲ公告スヘシ

一日本銀行ヨリ右消却紙幣ヲ大藏省ニ上納シタルトキハ
豫テ出納局ニ差出シ置キタル紙幣抵當公債證書ノ内右
消却高ニ相當スル員額ヲ大藏省ヨリ直チニ其銀行ニ還
付スヘシ

(十六年五月第十四号布告ニテ十六章ヲ十七章ト百十二
條ヲ百十三條ト改ム)

第十七章 條例ノ更正及ヒ廢止ノ事ヲ明カニス

第百十三條 此國立銀行條例ハ政府ノ都合ニ依リ要用ノ
事アレハ何時ニテモ之ヲ増補シ又ハ之ヲ更正シ又或ハ
之ヲ廢止スルコアルヘシ但シ右増補其他ノ節ハ直チニ
其由ヲ世上ニ公告スヘシ

●甲第八十五号六年五月三十日大藏省達

各地方ニ於テ從前掛屋名儀ノ者有之候處現今某縣銀行ト
相唱ヘ掛札致候向モ有之趣元來銀行ノ名稱ハ其條例ヲ踐
候上ニテ紙幣寮ヨリ許可ヲ受ケ相唱候儀ニ付猥リニ銀行
ノ名目相唱ハ不都合ノ次第ニ付私ニ銀行ト相唱候儀一切
不相成候條各地方廳ニ於テ不洩樣相達シ右樣ノ者有之候
ハ、早々改稱可申付候此段相達候事

○石油取締規則

○第六号 明治十六年二月五日布告

明治十四年八月第四十號及び同年九月第五十號布告石油取締規則左ノ通改定ス

但施行日限ノ儀ハ明治十五年八月第四十四號布告ノ通タルヘシ

第一條 石油ヲ分テ二種トシ閉塞發焔試驗法ヲ用ヒ攝氏驗温器三十度(華氏八十六度)以上ノ温度ニ達セサレハ發焔セサルモノヲ第一種トシ三十度ニ達セズシテ發焔スルモノヲ第二種トス

第二條 點燈用ニ供スルハ第一種ノ石油ニ限リ第二種ノ石油ハ醫療製藥調劑及ヒ物理學化學工藝上ニ於テ業用ニ供スルノ外之ヲ用フルヲ許サス

第三條 石油營業者ヲ分テ擴業者精製者問屋及ヒ小商賣

ノ四類トス其營業者ハ都テ管轄廳東京府下ノ許可ヲ受クヘシ但二類以上兼業スルトキハ別ニ其許可ヲ受クヘシ

第四條 石油ノ種類ハ内務卿ノ必要トスル地方ニ於テ検査員ヲシテ之ヲ検査セシムヘシ
石油ハ検査済ノ證アルモノニアラサレハ之ヲ販賣スルヲ許サス但擴業者ヨリ精製者ニ販賣スルハ此限ニアラス

第五條 検査済ノ石油ヲ家屋内ニ貯藏スルヲ得ルハ第一種ノ石油五石以内第二種ノ石油五斗以内トシ容器ハ漏出ノ虞ナキ不燃質物ニ限ルヘシ

第六條 石油營業者前條制限外ノ石油並ニ検査未滿ノ石油ヲ貯藏スル場所建物及ヒ精製所ノ構造方ハ都テ管轄廳東京府下ノ許可ヲ受クヘシハ警視廳

第七條 第二種ノ石油ハ精製者間屋ヨリ直ニ需用者ニ販賣シ小賣商ハ第一種ノ石油ニ限リ販賣スルヲ得ルモノトス

第八條 第二種ノ石油ヲ販賣スル者ハ購買者ヨリ其數量及ヒ需用ノ趣意年月日住所氏名ヲ詳記シタル書付ヲ取リ置キ一年間保存スヘシ但販賣時限ハ日出ヨリ日没マテトス

第九條 石油ヲ運搬スルトキハ其石油タルコトヲ表記スヘシ但其積卸ニ必用ナル時間ノ外物揚場又ハ路傍ニ置シヘカラス

第十條 此規則ヲ犯シタル者ハ二圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

右奉 勅旨布告候事

●第十号十六年三月十六日布告

明治十五年^{八月}第四十四号及本年^{二月}第六号布告石油取締規則施行日限ノ儀ハ追テ布告候マテ延期ス

右奉 勅旨布告候事

○質屋取締條例

○第九号明治十七年三月廿五日布告

質屋取締條例別冊ノ通制定シ明治十七年五月十五日ヨリ施行ス

右奉 勅旨布告候事

質屋取締條例

第一條 質屋營業ヲ爲ス者ハ管轄廳(東京府ハ警視廳)ノ免許ヲ受クヘシ

第二條 質屋ハ質物臺帳ヲ備ヘ其紙數ヲ記シ所轄警察署ノ檢印ヲ受ク可シ

第三條 質物臺帳ニハ警察官ニ於テ質物貸金質入主及質入受戻入換ノ年月日ヲ調査スルニ差支ナキ様記載スヘシ但證人ヲ要スルキハ質入主及證人ノ實印ヲ押捺セシメ置クヘシ

第四條 身元詳ナラサル者ヨリ質物ヲ取ルコトヲ得ス但身元詳ナル者證人タルキハ此限ニアラス

第五條 十五年未滿ノ者白痴風癩者及雇人(雇主ノ家ニアル者)ヨリ質物ヲ取ルコトヲ得ス但父母後見人雇主又ハ身元詳ナル者證人タルキハ此限ニアラス

官廳町村學校病院社寺會社ノ印章記号アル物品ハ其質入シ得ヘキヲ証明スル証人二名以上アルニ非サレハ之ヲ質物ニ取ルコトヲ得ス

前二項ニ違背シタル者ハ警察官ノ命ニ依リ元利金ヲ償フコト無ク質物ヲ取戻サル、コトアルヘシ

第六條 盜罪詐欺取財ノ罪又ハ刑法第三百九十九條第四百一條ノ處斷ヲ受ケタル者ヨリ物品ヲ質ニ取り又ハ寄藏シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ヘシ

第七條 贓物ノ疑アル物品又ハ身柄不相應ト認メタル物

品ヲ持來ル者アルキハ直ニ所轄警察署又ハ巡行ノ警察官巡查ニ密告スヘシ

第八條 流質物ヲ賣拂ハントスルキハ五日以前ニ其物品目錄ヲ所轄警察署ニ差出スヘシ

第九條 流質物ヲ賣拂ヒタルキハ警察官ニ於テ其物品代價及買主ヲ調査スルニ差支ナキ様流質物賣拂帳ニ記載スヘシ

第十條 贓物ノ品觸アルキハ到達シタル年月日時ヲ其品觸寫書ニ附記スヘシ

第十一條 品觸到達以後一年内ニ類似ノ物品ヲ質ニ取り又ハ寄藏シタルキ若クハ其以前ノ質物及寄藏品中ニ類似ノ物品ヲ發見シタルキハ直ニ所轄警察署ニ届出ヘシ

第十二條 質物臺帳流質物賣拂帳及品觸寫書ハ十年間保存スヘシ若シ亡失シタルキハ直ニ所轄警察署ニ届出ヘシ

シ

第十三條 警察官ハ何時タリモ質屋ノ店舖ニ臨ミ質物及帳簿ノ検査ヲ爲シ時宜ニ依リ其質物ヲ差押ヘ又ハ時々帳簿ヲ差出サシメ之ヲ検査スルコアルヘシ質屋ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十四條 此條例ニ違背シ又ハ詐偽ノ届出ヲ爲シタル者ハ二圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 此條例ヲ一年内ニ再犯シタル者ハ行政ノ處分ヲ以テ其營業ヲ禁止シ又ハ停止スルコトヲ得

第十六條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第十七條 營業上ニ付テハ家屬又ハ雇人ノ所爲ト雖營業者其責ニ任スヘシ

第十八條 此條例ヲ施行スルノ方法細則ハ警視總監府知

事(東京府ヲ除ク)縣令ニ於テ便宜取設ケ内務卿ニ届出
ヘシ

○古物商取締條例

○第五十号明治十六年十二月廿八日布告

古物商取締條例別冊ノ通制定シ明治十七年二月一日ヨリ
施行ス

右奉 勅旨布告候事

古物商取締條例

第一條 古物商トハ古道具、古本、古書畫、古着、古銅鐵、

潰金銀ヲ賣買スル營業者ヲ云フ○袋物屋小間物屋籠甲
屋時計屋飾屋箔打屋煙管屋ニシテ其營業ニ属スル古物
ヲ賣買交換スル者及ヒ刀劍商ハ此條例ニ準據スヘシ

第二條 古物商ハ管轄廳東京府ハ
警視廳ノ免許ヲ受クヘシ

第三條 古物商物品ヲ賣買シ又ハ交換シタルトキハ警察
官ニ於テ其物品及ヒ賣主讓主ヲ調査スルニ差支ナキ様
簿冊ニ記載シ且賣主讓主ヲ詳ニスルコトヲ得タルト

キハ之ヲ記載スヘシ

第四條 身元詳ナラサル者ヨリ物品ヲ買取リ又ハ交換スルコトヲ得ス但身元詳ナル者其證人タルトキ又ハ警察官若クハ巡查ノ認可ヲ受ケタルトキハ此限ニアラス

第五條 十五年未滿ノ者白痴風癩者及ヒ雇人雇主ノ家ニアル者ヨリ物品ヲ買取リ又ハ交換スルコトヲ得ス但父母後見人雇主又ハ身元詳ナル者其證人タルトキハ此限ニアラス官廳、町村、學校、病院、社寺、會社ノ印章記號アル物品ハ其實却シ得ヘキコトヲ證明スル證人貳名以上アルニ非サレハ之ヲ買取リ又ハ交換スルコトヲ得ス

前二項ニ違背シタル者ハ警察官ノ命ニヨリ無代價ニテ物品ヲ取戻サル、コトアルヘシ

第六條 古物商ハ營業者タルト否トヲ問ハス盜罪詐欺取財ノ罪又ハ刑法第三百九十九條第四百一條ノ處斷ヲ受

ケタル者ヨリ物品ヲ買取リ又ハ交換シ及ヒ寄藏スルトキハ警察官ノ許可ヲ受クヘシ違フ者ハ一月以上三年以下ノ重禁錮又ハ三拾圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第七條 古物商ハ自宅又ハ許可ヲ受ケタル市場及ヒ賣主讓主ノ居宅ノ外ニ於テ物品ヲ買取リ又ハ交換スルコトヲ得ス

第八條 刀劍又ハ之ヲ仕込ミタル器具ハ身元詳ナラサル者及ヒ盜罪購博ノ處斷ヲ受ケタル者ニ賣渡讓渡シ又ハ露店及ヒ路傍ニ於テ賣渡讓渡スコトヲ得ス

第九條 古物商物品ヲ他府縣ニ運送セントスルトキ又ハ他府縣ヨリ受取リタルトキハ其物品ノ目錄ヲ所轄警察署ニ届出ツヘシ

警察官ハ時宜ニ依リ荷作ヲ解キ物品ヲ檢査シ之ヲ差押フルコトアルヘシ但費用ハ届人之ヲ擔當スヘシ

第十條 贖物ノ品觸アルトキハ到達シタル年月日時ヲ其品觸寫書ニ附記スヘシ

第十一條 品觸到達以後一年内ニ類似ノ物品ヲ買取リ又ハ交換シ及ヒ寄藏シタルトキ若クハ其以前ニ之ヲ得タルマ、所持シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ツヘシ若シ届出テスシテ其理由ヲ辨解スルコト能ハサル者ハ第六條ノ刑ニ同シ

第十二條 物品ノ賣買交換ヲ記載シタル簿冊及ヒ品觸寫書ハ十年間保存スヘシ若シ亡失シタルトキハ直チニ所轄警察署ニ届出ツヘシ

第十三條 警察官ハ何時タリトモ古物商ノ店舖ニ臨ミ物品及ヒ簿冊ノ檢査ヲ爲シ時宜ニ依リ其物品ヲ差押ヘ又ハ時々簿冊ヲ差出サシメ之ヲ檢査スルコトアルヘシ古物商ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十四條 第二條第三條第四條第五條第七條第八條第九條第十條第十二條第十三條ニ違背シ又ハ詐偽ノ届出ヲ爲シタル者ハ二圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 第六條第十一條第十四條及ヒ刑法第三百九十九條第四百一條ノ處斷ヲ受ケタル古物商ハ管轄廳東京府ハ警視廳ニ於テ三月以上三年以下ノ特別取締ニ付スルコトヲ得

第十六條 特別取締ニ付セラレタル者ハ尙ホ左ノ項目ニ從フヘシ

- 一 物品ヲ買取リ又ハ交換シタルトキハ其賣主讓主ノ住所氏名年齢及ヒ物品ノ形狀徽章番號柄模様價額年月日時ヲ簿冊ニ記載スヘシ
- 二 日出前日歿後ハ物品ヲ買取リ又ハ交換シ及ヒ寄藏スルコトヲ得ス

- 三 營業者ニアラサル者ヨリ物品ヲ買取リ又ハ交換シタルトキハ其物品ヲ原狀ノ儘五日間保存スヘシ
- 四 物品ヲ賣渡シ又ハ交換シタルトキハ其物品ノ形狀價額年月日時ヲ簿冊ニ記載シ且買主讓受主ノ住所氏名年齢ヲ知り得タルトキハ之ヲ記載スヘシ
- 五 毎月一度物品賣買交換ノ簿冊ヲ所轄警察署ニ差出シ其檢査ヲ受クヘシ
- 六 住所ヲ移轉シ又ハ旅行シ又ハ他人ヲ宿泊同居セシメントスルトキハ所轄警察署ノ認可ヲ受クヘシ
- 第十七條 前條ニ違背シタル者ハ三圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第十八條 特別取締ニ付セラレタル者第六條第十一條第十四條第十七條ニ依リ罰金ニ處セラレタルトキハ直ニ之ヲ納完セシム若シ納完セサル者ハ留置セラルコト

アルヘシ

- 第十九條 古物商一年内ニ此條例ヲ再犯シタルトキハ行政ノ處分ヲ以テ其營業ヲ禁止シ又ハ停止スルコトヲ得
- 第二十條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス
- 第二十一條 此條例ヲ犯シテ買取リ又ハ交換シタル物品贓物ニ係ルモノハ營業者ニ依ルト否トチ問ハス警察署ニ於テ之ヲ追徵シテ被害者ニ還付スヘシ若シ被害者知レサルトキハ之ヲ領置シ一年ノ後官沒ス
- 第二十二條 商業上ニ付テハ家屬又ハ雇人ノ所爲ト雖モ營業者其責ニ任スヘシ
- 第二十三條 此條例ヲ施行スルノ方法細則ハ警視總監府知事東京府縣令ニ於テ便宜取設ケ内務卿ニ届出ツヘシ

○鳥獸獵規則

○第十一號明治十年一月廿三日布告

鳥獸獵規則別紙ノ通改正候條此旨布告候事

鳥獸獵規則

第一條 小銃ヲ用テ鳥獸ヲ獵シ生業トスル者ヲ職獵トシ遊樂ノタメニスルヲ遊獵トス

第二條 銃獵免狀ナキモノハ總テ銃獵スルヲ禁ス但有害ノ鳥獸ヲ除シカタメニハ地方官ノ便宜ヲ以テ臨時ノ免許ヲ與フヘシ

第三條 十四年十一月第六十號布告ニテ改正 銃獵免狀ヲ得ント欲スル者ハ願書ニ族籍職分住所姓名年齢ヲ詳記シ東京府下ニ於テハ警視廳其他ハ該地方官廳ヘ差出スヘシ

第四條 免狀ハ其効一期限ニ止マルモノトス免狀ハ貸借シ賣買シ若クハ授受スルコトヲ禁ス

第五條 免狀ヲ願受ル者ハ左ノ通免許稅ヲ納ムヘシ

一 職獵稅

金一圓

一 遊獵稅

金十圓

第六條 十四年十一月第六十號布告ニテ改正 水火盜難其他ノ事故ニヨリ免狀ヲ毀失スル時ハ速ニ東京府下ニ於テハ警視廳其他

ハ該地方官廳ニ届出ヘシ再ヒ免狀ヲ願受ル者ハ更ニ稅金ヲ納ムルニ及ハスト雖モ手數料トシテ金二十五錢ヲ納ムヘシ

第七條 左ニ記列シタル者ニハ免狀ヲ付與セサルヘシ

一 拾六歲未滿ノ者

一 白痴瘋癲等ノ者

一 故ナシ弓箭銃砲ヲ放ツノ刑ヲ受ケシ者

第八條 左ニ記列シタル場所ニ於テハ銃獵ヲナスヲ禁ス
一 都府市街ハ勿論衆人群集ノ場所

一銃丸ノ達スヘキ恐レアル人家ニ向ヒタル距離ノ場所
一禁獵制札ノ場所

但制札ハ銃獵ニ挺テ交又シタル圖ノ下ニ銃獵禁制ノ
四字ヲ記シ掲ケ置クヘシ

一作物植付ケアル田畑内或ハ社寺人家等ノ構内

但該主又ハ管守人ノ許諾ヲ得タル者ハ此限ニアラス

第九條 獵銃ハ和銃玉目四匁八分以下並ニ西洋銃ニ限ル

ヘシ軍銃ヲ用フルヲ禁ス

(十年十二月十七日第八十五號布告ニテ但書追加)

但開拓使管内ニ限り和銃玉目拾匁以下ヲ用フルヲ得

ヘシ

第十條 銃獵期限ハ十月十五日ヨリ四月十五日迄ヲ以テ

一期トス是時限ノ外ハ銃獵ヲ禁ス

但地方ノ景況ニヨリ已ムヲ得ス此期限ヲ伸縮スル時

ハ其理由ヲ内務省ヘ届出ヘシ

第十一條 日没ヨリ日出迄ノ時間ハ銃獵ヲ禁ス

第十二條 凡ソ出獵スル者ハ必ス其免狀ヲ携帯スヘシ出

獵中警察官吏區戸長村役人等免狀ヲ看ント請フ者アル

時ハ直ニ之ヲ示スヘシ

第十三條 地主其所有地内ニ於テ他人ノ銃獵スルヲ有害

トスル時ハ第八條所示ノ如キ制札ヲ建テ其周圍ニ繩張

又ハ假圍ヲナスヘシ

第十四條 一凡テ一期内再犯以上ノ者ハ其罰金ヲ倍科スヘ

シ

第十五條 銃獵ヲ生業トスル者ニアラスシテ職獵ノ免狀

ヲ受ケ遊獵スル者ハ五十圓ノ罰金ヲ科シ免狀取上ケ其

期内銃獵ヲ禁スヘシ

第十六條 總テ犯則ノ者ヲ他ヨリ証跡ヲ取リ訴出ル時ハ

犯人罰金ノ半ヲ賞トシテ與フヘシ

第十七條 第十四條第十五條ノ外此諸規則ヲ犯ス者ハ三

圓ヨリ少ナカラス二十圓ヨリ多カラサル罰金ヲ科スヘ

シ

第十八條

十年十二月十七日第八十五號布告ニテ追加

開拓使管内ニ入り鹿獵

ヲ爲ス者ハ該使施行ノ規則ニ遵フヘシ

○印紙類賣捌規程

○第九号明治十七年四月廿二日布達

印紙類賣捌規程左ノ通相定明治十七年六月一日ヨリ施行ス

但從前ノ印紙賣捌手續ハ總テ同日ヨリ廢止ス

右布達候事

印紙類賣捌規程

第一條 印紙類ノ賣捌ハ陸軍恩給令海軍恩給令巡査看守

給助例ニ依テ傷瀆ノ爲メ終身恩給ヲ受クル者及ヒ陸軍

恩給令第二條第三項ニ掲グル寡婦(孤兒)ニシテ扶助料

ヲ受クル者ニ限リ之ヲ許可スヘシ

第二條 府知事縣令ハ適宜每郡區内ニ印紙類賣捌人員ヲ

定メ之ヲ大藏省ニ届出ヘシ

第三條 第一條ノ資格ヲ有スル出願者第二條ノ定員ニ滿

ヲサル時ハ一般陸軍恩給令海軍恩給令巡查看守給助例ニ依リ恩典ヲ受クル者ヲ以テ之ニ充ツヘシ

但本條ヲ以スルモ猶定員ニ充タサル地方ニ於テハ二ケ年以内ノ期限ヲ定メ一般人民ニ許可スルコトヲ得

第四條 印紙類ノ賣捌ヲ爲サントスル者ハ現居住地方ノ郡區役所ニ願出管轄廳ヨリ賣捌所看板ヲ受ケ之ヲ店頭ニ掲クヘシ

第五條 印紙類賣捌所ハ一人一ヶ所ニ限り許可スルモノトス

第六條 此規程ニ依リ賣捌クヘキ印紙類左ノ如シ

- 一 證券界紙
- 一 烟草印紙
- 一 訴訟用印紙
- 一 賣藥印紙

第七條 印紙類ハ必ス定價ヲ以テ賣捌クヘシ賣捌ノ外讓與貸與スルコトヲ許サス

第八條 印紙類ハ其代金ヲ上納セシメタル後下渡スヘシ但第一條ノ資格ヲ有スル者及ヒ第三條ノ受恩典者ニハ其代金五百圓マテ公債證書ヲ抵當トナシ六ケ月以内之ガ延納ヲ許スコトアルヘシ

第九條 印紙賣捌手数料ハ第一條ノ資格ヲ有スル者ニハ賣捌代金高百分ノ十其他ノ者ニハ百分ノ七ヲ給スヘシ第十條 賣捌人ニシテ左ノ事項ニ該ル者ハ賣捌殘餘ノ印紙類及ヒ賣捌所看板ヲ返納スヘシ此場合ニ於テハ返納印紙代金ニ對スル當初下渡ノ手数料ヲ除去シ其殘額ヲ返付スヘシ

- 一 恩給ヲ受クルノ權消絶シタル時
- 一 恩給停止ノ時

一廢業シタル時

一此規程ニ背キ營業禁止又ハ停止セラレタル時

第十一條 印紙類火災盜難等ノ爲メニ亡失スルモ其金ノ

返付ヲ請求スルコトヲ得ス但避クヘカラサル事變ニ遭

遇シタル者ハ事狀ヲ具シテ處分ヲ乞フヘシ

第十二條 印紙類ノ損傷又ハ汚染シタル時ハ其印紙ニ代

金百分ノ五ノ金額ヲ添ヘ印紙交換ヲ請求スルコトヲ得

第十三條 此規程ニ違背シタル者ハ情狀ニ依リ管轄廳ニ

於テ其營業ヲ禁止シ又ハ停止スルコトアルヘシ

○牛馬賣買規則

○第三百三十號明治五年十一月四日布告

牛馬賣買渡世之者免許稅ノ儀昨辛未十二月中大藏省ヨリ
相達候處今般別紙規則書之通相定候條各管内共區々ノ取
計無之様可致候事

別紙

牛馬賣買渡世之者免許稅ノ儀昨辛未十二月相達候處今
度御詮議ノ次第モ有之別紙之通規則相定候條是迄相渡
候免許鑑札ハ引換相渡シ引上ケ候分ハ各府縣廳ニ於テ
取纏ノ燒捨其段可申立候其餘ハ規則ニ隨ヒ所置可致事
規則

第一條 各管轄所ニ於テ其管下牛馬賣買渡世之者取調牛
馬一鼻綱ニ付免許鑑札一枚相渡可申事
但一鼻綱ハ牛馬共七疋ニ限鑑札一枚ヲ所持スル者族

行之時ハ七疋以内二枚ヲ所持スル者ハ十四疋ニ限ル
ヘシ其餘準之可申事

第二條 七年四月二十日布告第 四十五号ヲ以此條改正

月以前ハ全年分七月以後ハ半年分納税シ廢業ノ者七月以後ハ全年分六月以前ハ半年分納税可致事

第三條 免許鑑札萬一燒失流盜難等ニテ失ヒ候モノ有之其段申出候ハ、事實取調鑑札相渡可申事

第四條 免許鑑札一枚ニ付一ケ年税金一圓上納可致事
(八年七月七日布告第百十五號ヲ以但書改正)

但右税金ハ毎年二月八月兩度ニ半額宛各管廳ヘ取立租稅寮ヘ上納可致尤新規免許ノ者ハ其都度半額直ニ取立上納可致候事

第五條 免許鑑札燒印并ニ押切判ハ雛形ノ通其管轄所ニテ製造致シ各稼人共ヘ相渡可申事

但鑑札相渡次第稼人共國郡町村名及ヒ名面等詳細取調右鑑札印鑑相添當省ヘ可差出事

第六條 右標取締相立候上ハ向後無鑑札ニテ賣買不相成萬一無鑑札ニテ密々賣買候者有之相顯ルニ於テハ牛馬共取上ケ免許税十倍之科料可申付事

但密賣買候者他ヨリ見出シ訴出ルニ於テハ其訴主ヘ取上ケ牛馬拂代金ノ十分ノ二褒美トシテ被下候事

第七條 取上牛馬拂代并科料金等之儀ハ第四條但書ニ照準上納可致事

第八條 此規則施行ニ付候諸入費ハ一ケ年試驗之上可申立事

第九條 七年十二月三日布告第百三十一號ヲ以此條追加 免許鑑札ハ貸借決テ不相成候事

但免許鑑札借受賣買スル者ハ規則第六條密賣買ノ廉

ニ照シ處分可致貸渡シ候者ハ免許稅五倍ノ科料可申
付事

右之通規則相定候事 (鑑札雛形略ス)

○富籤賣買牙保幫助及購買者處分方

○第廿五号明治十五年五月廿四日布告

明治元年十二月二十三日ノ布告ニ原ツキ富籤賣買ノ牙保
幫助ヲ爲シ及富籤ヲ購買シタル者處分方左ノ通制定ス

第一條 凡富籤賣買ノ牙保若クハ幫助ヲ爲シタル者ハ一
月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ

罰金ヲ附加ス

第二條 凡富籤ヲ購買シタル者ハ其價ヲ拂ヒタルト未ダ
拂ハサルトヲ問ハス二十日以上四月以下ノ重禁錮ニ處
シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス他人ノ名ヲ借り
テ購買シタル者及他人ヨリ讓リ受ケタル者亦同シ

第三條 第一條第二條ノ罪ヲ再犯シタル者ハ同條ニ定メ
タル刑期金額ノ二倍ニ處ス但初犯ニ科シタル刑期金額
ニ下ルヲ得ス

第四條 富籤ニ關スル犯罪ヲ告發シタル者ニハ其徵スル所ノ罰金ノ半額ヲ給與ス

第五條 富籤ニ關スル罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ其罪ヲ免ス

第六條 富籤ニ關スル犯罪ニ因テ得タル財物ハ之ヲ沒收ス

自首ニ因テ罪ヲ免シタル者ト雖モ財物沒收ハ仍ホ前項依ル

右奉 勅旨布告候事

●明治元年十二月二十三日布告

富興行ノ義ハ兼テ御禁制ニ有之候處近年諸國ニ於テ金錢融通ヲ名トシ或ハ社寺再建等ニ托シ與行致候向モ有之趣元來澆季ノ弊風僥倖ノ利ヲ以テ民心ヲ誘惑スルヨリ自然農工商共其職業ヲ惰リ往々之ヲ爲ニ家産ヲ破リ候者モ不

少哉ニ相聞ヘ以ノ外ノ事ニ候斯御一新之折柄右様ノ所業殊ニ御趣意ニ相戻リ候義ニ付更ニ嚴禁被仰出候事

○北海道水產物取獲法

○第十二号十七年五月二日布告

北海道ニ於テ納稅スヘキ水產物ヲ取獲セントスルモノハ其地ノ管廳ヘ願出許可ヲ受クヘシ違フモノハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其物品ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタルモノハ其代價ヲ追徵ス

右奉 勅旨布告候事

●第四号十七年二月十六日布告

根室縣下千島國及北見國紋別常呂網走斜里ノ四郡ニ於テハ拾昆布稅收獲高ノ現品一割ヲ徵收シ函館縣下渡島國松前郡ニ於テハ帆立身稅收獲高ノ現品二割ヲ徵收ス但本年五月一日ヨリ施行ス

右奉 勅旨布告候事

●第十六号十七年五月廿三日布告

自今北海道ニ於テ臘虎并羆熊獸ヲ獵獲スルヲ禁ス犯ス者ハ刑法第三百七十三條ニ照シテ處斷シ仍ホ其獵獲物ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徵ス

但農商務卿ノ特許ヲ得タル者、此限ニアラス

右奉 勅旨布告候事

○養豚

○第百六十三号明治六年五月十五日布告
 方今牛豚類ノ牧畜盛ニ行ハレ候所温暑ノ時ニ方テハ其臭
 氣人身ノ健康ヲ害スルノミナラス近來獸類ノ傳染病流行
 往々人生ノ傷害ヲ醸シ候ニ付自今三府市街ノ區内ハ勿論
 各地一般人家稠密ノ場所ニテ養豚ノ儀堅ク禁止候條右區
 内ニ於テ從前營業ノ者ハ布令到達ノ日ヨリ三十五日以內
 ナ以テ郊外便宜ノ地ニ立退養豚可致事
 但東京府下朱引内ハ假令草野空間ノ地ト雖モ養豚不相
 成候尤乳汁搾取ノヲメ養豚候ハ被差許候得共不潔臭穢
 ノ儀モ有之候ヘハ詮議ノ上可令取拂事

○皇城內商店

○九年一月廿日達東京府
 皇城接近之場所ニ於テ商店ヲ開キ候テハ不取締ニ付左ノ
 區域内ハ開店商業不相成儀ト可心得此旨相達候事

- 櫻田 馬場先 和田倉 雉子橋 一ツ橋
- 神田橋 常盤橋 道三橋 錢鑿橋

入堀ヲ
境トス

○ 金銀分拆

○第六十八号五年三月四日布告

金銀分拆ノ儀自今無願營業禁止候條地方官ニ於テ不取締
無之様可致候尤開業致度段願出候者有之候ハ、其者ノ身
元並開業ノ規則等詳細取調大藏省ニ伺出候事

○ 銘紙贗造

○丙第十号十年二月廿三日内務省達東京府大坂府五港

諸印紙類贗造制禁ノ儀ハ人民熟知ノ筈ニ有之候所往々船
來麥酒等ニ貼付ノ銘紙ヲ贗造シ販賣致シ候向モ有之哉ニ
相聞候條以來右銘紙等贗造不致様管下人民ニ可相達此旨
相達候事

○ 禁刀

○第三十八號明治九年三月廿八日布告

自今大禮服用並ニ軍人及ヒ警察官吏等制規アル服用用ノ節ヲ除クノ外帶刀被禁候條此旨布告候事

但違犯ノ者ハ其刀可取上事

●甲第五号九年七月二十日教部省達神宮國幣社神官

諸神社神與渡御之節供奉之者其從前甲冑又ハ大紋索袍等着用ニテ帶刀致シ來候向ハ供奉中ニ限リ一社ノ古例ニ任セ帶刀不苦候尤モ其都度其筋へ届出候儀ト可心得此旨相達候事

●乙第卅一号十年三月八日内務省達

巡查ニシテ警部之職務ヲ行フモノハ其節ニ限リ帶劍不苦候條此旨相達候事

但劍並屬具共警察費ヲ以テ適宜調製シ各署へ備置入用

之都度相渡候様可致事

●乙第二十一号十一年三月四日内務省達

諸神社神與渡御之節供奉之者帶刀之儀ニ付明治九年七月舊教部省甲第五號ヲ以神宮並官國幣社へ相達置候趣候所右ハ府縣社以下モ同様專テ古代之裝飾ニ摸倣シ神輿ニ供奉致來候舊例有之向ハ其人員ノニ供奉中ニ限リ帶刀不苦尤其都度其筋へ可爲届出儀ト可心得此旨相達候事

但普通祭服用用之者帶刀不相成儀ハ勿論タルヘシ

●第六十三号十五年十二月二日達

自今巡查ニ帶劍セシムルコトヲ得ヘシ此旨相達候事

○官吏商業

○第六十五号八年四月廿三日達

官吏商賈ノ營業不相成ハ勿論ニ候所其區分判然タラサルニ付自今左ノ通被定候條此旨相達候事

但從前ノ指令之レニ抵觸スルモノハ廢止ト可心得事

第一條 凡ソ官吏タルモノ並ニ其家族トモ他ノ物品ヲ買入レ之ヲ餘人ニ賣以テ利ヲ獲ルモノ或ハ他ノ生産ヲ買入レ製作ヲ加ヘ之ヲ販賣シテ利ヲ獲ル等ノ業一切禁止ノ事

(八年十月十二日公達第七十六号ニテ但書改正)

但神官教導職區戶長郵便取扱人學區取締役及等外吏ノ分ハ此限ニアラス

第二條 官吏ノ家族自己ノ財ヲ以テ商賈ノ業ヲ營マント欲スル者ハ分籍別居ノ上相營ムヘキ事

第三條 左ノ數件ハ商賈ノ業ニアラサルニ付官吏タル者ト雖モ制禁ニアラサル事

但商賈同様ノ店ヲ開クハ不相成候事

一 八年五月公達第八十七號ニテ改正 礦山借區營業及ヒ田地ヲ所有シ其利ヲ獲ル事

一 田地家屋ヲ貸シテ地代宿賃ヲ獲ル事

一 金銀ヲ貸シテ利息ヲ獲ル事

一 所有地ヨリ生スル物産ニ製作ヲ加ヘ賣拂事

●第百五十二號八年八月廿七日達

官地官林及ヒ不用ノ物品等公ケノ入札法ヲ以テ拂下候節其管廳ニ屬スル官員ニ限リ本人ハ勿論其代理人ト雖モ投票爲致候義不相成候條此旨相達候事

●第三十七號十四年五月六日達

官吏商業區分ノ義ニ付テハ兼テ相達候趣モ有之候處自今

道路河港ノ修築海陸ノ運輸土地ノ開墾及ヒ殖産ノ事業ヲ以テ目的ト爲シ設立スル會社ノ株主トナルハ不苦候條此旨相達候事

○官費留學生被雇

○第百八十三号六年五月三十日布告

官費留學生歸朝ノ上ハ相應御用奉務可致等ニ候條文部省ノ許可ヲ得サレハ私ニ内外人民ニ被雇候儀ハ不相成事

○華士族合家

○第七十五号九年五月二十日布告

明治六年^一月第二十八号第五項及^八同年^八第三百一号ヲ以

テ合家ノ儀布告候所詮議ノ次第有之自今被禁止候條此旨
布告候事

一但從前既ニ合家セシ分ハ今後左ノ通可取扱事

一分家セント欲スルモノハ其合家セシ本人ノ一代中ニ限

リ復舊スルコトヲ許ス其子孫ニ至テハ七年第七十三號布

告分家ノ例ニ據ルヘシ

一戸籍記載方及ヒ刑律上ノ關涉ニ於テハ戶主ノ血屬ハ等

親ニ依リ其血屬ナキハ等親外ノ親屬タルヘシ

一士族平民合家セシモノハ總テ士族ニ編入スヘシ

○人身賣買禁

○明治三年八月十三日布告

各港在留ノ支那人共竊ニ童男女ヲ買取海外へ可連越奸計
相企候者有之既ニ捕押ヘニ相成候ニ付追テ嚴重ノ處置可
有之候得共元來外國人へ御國民賣渡候儀ハ第一御國躰ニ
於テ不相濟事ニ候間向後地方官ニ於テ管内屹度取締相立
教育行届候様厚ク相心得可申此旨相達候事

●第五十五號五年二月廿五日布告

各港在留ノ支那人共我窮民ノ幼兒ヲ買取候儀ニ付テハ去
ル庚午八月中相達候得共未タ右様ノ所業致候者モ有之哉
ノ趣畢竟内國人ヨリ賣渡候故支那人ニ於テモ買取本國へ
連行販賣スルニ至候次第ニテ御國禁ヲ犯シ不容易儀ニ付
向後右等不心得ノモノ於有之ハ嚴重處置ニ可及候間地方
官ニ於テ管内取締厚ク可加教育候事

●第二百九十五號五年十月二日布告

- 一人身ヲ賣買致シ終身又ハ年期ヲ限リ其主人ノ存意ニ任セ虐使致シ候ハ人倫ニ背キ有マシキ事ニ付古來制禁ノ處從來年期奉公等種々ノ名目ヲ以テ奉公住爲致其實賣買同様ノ所業ニ至リ以ノ外ノ事ニ付自今可爲嚴禁事
- 一農工商ノ諸業習熟ノ爲メ弟子奉公爲致候儀ハ勝手ニ候得共年期滿七年ニ過リ可カラサル事
- 但双方和談ヲ以テ更ニ期ヲ延ルハ勝手タルベキ事
- 一平常ノ奉公人ハ一ケ年宛タルヘシ尤奉公取續候者ハ証文可相改事
- 一娼妓藝妓等年季奉公人一切解放可致右ニ付テノ貸借訴訟總テ不取上候事
- 右ノ通被定候條屹度可相守事

●第二十二號五年十月九日司法省布達

本月二日太政官第二百九十五號ニテ被仰出候次第ニ付左ノ件々可相心得事

- 一人身ヲ賣買スルハ古來ノ制禁ノ處年季奉公等種々ノ名目ヲ以テ其實賣買同様ノ所業ニ至ルニ付娼妓藝妓等雇人ノ資本金ハ賍金ト看做ス故ニ右ヨリ苦情ヲ唱フル者ハ取糾ノ上其金ノ全額ヲ可取揚事
- 一全上ノ娼妓藝妓ハ人身ノ權利ヲ失フ者ニテ牛馬ニ異ナラス人ヨリ牛馬ニ物ノ返辨ヲ求ムルノ理ナシ故ニ從來全上ノ娼妓藝妓ヘ借ス所ノ金銀並ニ賣掛滯金等ハ一切債ルヘカラサル事

但本月二日以來ノ分ハ此限ニアラス

一人ノ子女ヲ金談上ヨリ養女ノ名目ニ爲シ娼妓藝妓ノ所業ヲ爲サシムル者ハ其實際上則チ人身賣買ニ付從前今後可及嚴重ノ所置事

●第二百二十八號八年八月十四日布告
金錢貸借ニ付引當物ト致候ハ賣買又ハ讓渡ニ可相成物件
ニ限リ候ハ勿論ニ候處地方ニ寄リ間ニハ人身ヲ書入致候
者モ有之哉ノ趣右ハ嚴禁ニ候條此旨布告候事
但期限ヲ定メ工作使役等ノ勞力ヲ以テ負債未償フハ此
限ニアラス

○民事訴訟用印紙規則

第五號明治十七年二月廿三日布告

民事訴訟用印紙規則別紙ノ通制定シ明治十七年四月一日
ヨリ施行ス

但明治八年^{十二}月 第九十六號布告訴訟用印紙規則ハ右
施行ノ日ヨリ廢止ス

右奉 勅旨布告候事

民事訴訟用印紙規則

第一條 凡ソ民事訴訟ノ書類ニハ此規則ニ從ヒ印紙ヲ貼
用スルモノトス

第二條 訴狀ニハ正本一通ニ付請求ノ金額若クハ價額ニ
應シ左ノ區別ニ從ヒ其受付ノ片ニ於テ印紙ヲ貼用スヘ
シ
價額五圓マテ 二十錢

同十圓マテ	三十錢
同二十圓マテ	六十錢
同五十圓マテ	一圓五十錢
同七拾五圓マテ	二圓二十錢
同百圓マテ	三圓
同二百五十圓マテ	六圓五十錢
同五百圓マテ	十圓
同七百五十圓マテ	拾三圓
同千圓マテ	十五圓
同二千五百圓マテ	二十圓
同五千圓マテ	廿五圓
同五千圓以上ハ千圓マテ毎ニ二圓ヲ加フ	
扣訴ニ於テハ右半額上告ニ於テハ全額ノ印紙ヲ加貼ス	
ヘシ	

第三條 人事其他金額ニ見積ル可ラサルモノハ三圓ノ印紙ヲ貼用ス可シ其扣訴上告ニ於テ加貼スルハ前條ニ同シ

但人事ニ於テハ極貧ノ者ニシテ戶長ノ証書ヲ所持スル者ハ裁判官ニ於テ印紙ノ貼用ヲ免スルコトアル可シ

第四條 左ノ書類ニハ正本一通ニ付二十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

答辨書證據物寫辨駁書辨論書上申書陳述書等
証人鑑定人評價人引合人等ノ呼出ヲ請求スル願書
審判ノ延期ヲ請求スル願書

第五條 左ノ書類ニハ正本一通ニ付五十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

官吏ノ臨檢ヲ請求スル願書
財產差押又ハ物品公賣ヲ請求スル願書

執行命令書ヲ請求スル願書

身代ノ處分ヲ請求スル願書

第六條 裁判言渡書ノ謄本ヲ下付スル片差出ス受取書ニ

其謄本一枚五錢其ノ他ノ謄本ヲ下付スルトキ差出ス受

取書ニハ其謄本一枚三錢ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用ナ可

シ

但裁判言渡書ノ謄本ハ一枚十二行一行十二字詰其他

ノ謄本ハ一枚二十行一行十八字詰トス

第七條 勸解ニ於テハ一件毎ニ勸解表ニ署名ノ片二十錢

ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第八條 此規則ニ依リ貼用シタル印紙ノ代價ハ曲者ヨリ

直者ニ辨償ス可キモノトス

第九條 印紙ノ種類定價及ヒ貼用方ハ布達ヲ以テ之ヲ定

ム

第十條 印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣

セシム其他ニ於テ賣買スルコトヲ得ス

第十一條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ二

十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒

收ス其情ヲ知テ之ヲ買取シタル者ハ十圓以上百圓以下

ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス

第十二條 前條ノ規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不論罪及

ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ申ヒス

●第四號十七年二月廿三日布達

今般第五號布告ヲ以テ訴訟用印紙規則制定候ニ付印紙ノ

種類定價及ヒ貼用方左ノ通之ヲ定ム

淡黑色印紙 一枚三錢

黑色印紙 同五錢

赭色印紙 同十錢

茶褐色印紙

同五十錢

黃色印紙

同壹圓

青色印紙

同五圓

橙黃色印紙

同十圓

終色印紙

同十五圓

婿栗色印紙

同二十圓

印紙ハ訴狀其他書類ノ正本ニ貼用シ貼用者ノ印章ヲ以テ

消印スヘシ

右布達候事

●第六号十七年三月十九日布達

本年二月第四号ヲ以テ及布達候民事訴訟用印紙ハ別紙見本

ノ通トス

右布達候事

○ 代理人規則

○甲第一號明治十三年五月十三日司法省布達

明治九年當省甲第一號代理人規則左ノ通改正候條此旨布達候事

但該規則ニ牴觸スル從前ノ布達ハ總テ廢止タル可シ

代理人規則

第一款 總則

第一條 代理人ハ法令ニ於テ代言ヲ許サレタル詞訟ニ付テ原告又ハ被告ノ委任ヲ受ケ其代言ヲ爲ス者トス

第二條 代言ノ業ヲ爲サント欲スル者ハ第四款ニ掲グル所ノ手續ニ依リ定式ノ試驗ヲ經テ司法卿ノ免許ヲ受クヘシ

第三條 免許ヲ受ケシ代理人ハ大審院及ヒ諸裁判所ニ於テ代言ヲ爲スヲ得

第四條 代言人ノ免許ヲ得ル能ハサル者左ノ如シ

一 未丁年者

二 身代限リノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者

三 盜罪詐僞罪ニ付刑ヲ受ケタル者

四 十四年一月司法甲 第二號達ニテ改正 懲役禁獄一年以上ノ刑ニ處セラレタルモノ

五 官吏准官吏及ヒ公私ノ雇人

第五條 免許ヲ受ケシ者ハ必ス第二款ニ掲クル所ノ代言人ノ組合ニ入りテ其規則ヲ守ル可シ若シ一時他管ニ出テ代言ヲ爲スルハ其地組合ノ規則ヲ遵守ス可シ

第六條 代言人新ニ免許ヲ受ケシ時及ヒ他ノ地ニ轉住セント欲スル時ハ其業ヲ爲ス所ノ裁判所及ヒ檢事（檢事ナキ地ハ檢事ノ職務ヲ攝行スル者以下之ニ做フ）並ニ

會議長ニ其旨ヲ届ケ廢業ノ時ハ免許狀ヲ檢事ニ返納ス可シ

第七條 代言免許ハ滿一年（月ヲ以テ算フ）ヲ以テ限トシ 免許料ハ金拾圓トス其業ヲ繼續セント欲スル者ハ毎年 免許料ヲ納ム可シ既ニ納メタル免許料ハ廢業停業除名ノ時ト雖モ之ヲ還付セス

第八條 新規出願ノ者ハ免許狀ヲ受ル時免許料ヲ直ニ檢事ニ納ム可シ

引續出願ノ者ハ必ス免許期限ノ盡ル前願書ニ免許料ヲ添ヘ檢事ニ差出ス可シ

但右手續ヲ爲シタル日ハ期限後ニ係リ未タ免狀ノ下付有ラサルモ其儘代言ヲ爲スヲ得可シ

第九條 免許料ヲ納メサルヲ以テ免許ヲ得ス又ハ期限前ニ於テ引續願ヲ爲サスシテ免許ノ効ヲ失ヒシ者再ヒ代

言ヲ爲サント欲スル時ハ新規出願ノ手續ニ循フ可シ

第十條 免許狀ヲ紛失シ又ハ氏名ヲ改メシ者ハ更ニ免許狀下付ノ願ヲ檢事ニ出ス可シ

但願書ノ副本ニ檢事ノ檢印ヲ受ケ置キ引替免許狀下附迄ハ之ヲ以テ免許代理人タルノ證ト爲ス可シ

第十一條 代言ヲ爲スコハ必ス詞訟本人ノ委任狀ヲ受ク可シ

第十二條 代言人ノ懲罰ハ第三依款ニテ處分ス可シ

第十三條 代言人ノ所業ニ因リ生シタル詞訟本人並ニ相手方關係人ノ損害ハ其代言人ニ於テ之ヲ償フ可シ

第二款 議會

第十四條 代言人ハ各地方裁判所本支廳所轄每一ノ組合ヲ立テ議會ヲ設ケ左ノ目的ヲ以テ規則ヲ定メ契約ヲ固クス可シ但組合ハ各裁判區ノ廣狹遠近ニ依リ檢事ノ

見計ヲ以テ之ヲ分合スルコトアル可シ

一 互ニ風儀ヲ矯正スル事

二 名譽ヲ保存スル事

三 法律ヲ研究スル事

四 誠實ヲ以テ本人ノ依頼ニ應スル事

五 強テ本人ノ權利ヲ捏造セサル事

六 妄リニ言詞ヲ變改セサル事

七 故ナク時日ヲ遷延セサル事

八 相當謝金ノ額ヲ定ムル事

但該規則ハ必ラス檢事ノ照閲ヲ經可シ其改正増補モ亦之ニ同シ

第十五條 組合毎ニ會長一名副會長一名又ハ二名ヲ毎年第一次會ニ於テ投票ノ多數ヲ以テ定ム可シ若シ投票ノ數相均シキ時ハ先キニ免許ヲ得タル者ヲ以テシ其時日

相同シキ時ハ年長ノ者ヲ以テ之ニ充ツ可シ

第十六條 會長ハ議會ノ管理ヲ爲シ副會長ハ會長ヲ補助シ會長差支アル時ハ之カ代理ヲ爲ス可シ其任期ハ各滿一年トス但每期投票多數ヲ得ル者ト雖モ其職務ヲ繼續スルハ三期ヲ以テ限リトス

第十七條 第二十二條ニ記載シタル條件ヲ犯ス者アル時ハ各代言人ハ之ヲ會長ニ報告シ會長ハ之ヲ檢事ニ告發ス可シ

若シ會長告發ヲ逕延シ又ハ其所犯會長ニ係ル時ハ各代言人ヨリ直ニ檢事ニ告發ス可シ

第十八條 議會ヲ開クハ毎年二次ヲ以テ定例ト爲シ其日數一次十五日ヲ過クルヲ得ス若シ已ムヲ得サル場合ニ於テ期日ヲ延サントスルカ又ハ臨時會ヲ開カントスル時ハ必ス檢事ノ認可ヲ受ク可シ但其會費ハ各代言人ニ

於テ之ヲ擔當スル者ト爲ス

第十九條 會長ハ組合總員ノ名簿ヲ作り其本貫族籍住所年齡及ヒ代言免許ノ年月日ヲ記シ轉住廢業懲罰ノ事アル毎ニ其旨ヲ記ス可シ

第二十條 議會中詞訟事件ニ付參會スルヲ得サル場合ニ於テハ其旨ヲ會長ニ届出可シ

第二十一條 會長及ヒ副會長ト雖モ代言ノ職業ニ付テハ一般ノ代言人ト異ナルナシ

第三款 懲罰

第二十二條 代言人左ノ條件ヲ犯ス時ハ輕重ヲ量リ第二十

三條及ヒ第二十四條ニ依テ懲罰ス可シ

一 訟廷ニ於テ現行ノ法律ヲ誹議スル者

二 訟廷ニ於テ官吏ニ對シ不敬ノ所業ヲ爲ス者

三 訟廷ニ於テ相手方ヲ凌辱罵詈シタル者

- 四 詞訟ヲ教唆シタル者
- 五 證據ト爲ル可キ者ヲ捏造シタル者
- 六 他人ノ詞訟ヲ買取リ自己ノ利ヲ圖ル者
- 七 強テ謝金ヲ前收シ又ハ過當ノ謝金ヲ貪リタル者
- 八 故サラニ時日ヲ遷延シ詞訟本人並ニ相手方關係人ノ妨害ヲ爲シタル者
- 九 議會組合ノ外私ニ社ヲ結ヒ號ヲ設ケ營業ヲ爲シタル者
- 十 議會ニ於テ定メタル取締規則ヲ犯シタル者
- 第廿三條 懲戒ノ目次左ノ如シ
 - 一 譴責
 - 二 停業
 - 三 除名
- 第廿四條 所犯法律ニ該ル者ハ法律ニ依テ處斷シ仍ホ第廿三條ノ罰目ヲ併科スルコトアル可シ
- 第廿五條 譴責ハ止テ呵責シテ業ヲ停メス停業ハ一月以

上一年以下其業ヲ停メ除名ハ代名人名簿ノ名ヲ除キ三年ヲ經ルノ後ニ非サレハ復テ代名人タルヲ得ス若シ其所犯ノ情狀重キ者ハ終身之ヲ許サス

第廿二條ノ懲罰ヲ受ケタル者アルトキハ其旨ヲ裁判所ノ扣所ニ揭示スヘシ

第四款 出願

第廿六條 代言免許ヲ願フ者ハ第廿九條ノ書式ニ倣ヒ願書ヲ作り現任戶長(又ハ區長)ノ奥印ヲ受ケ履歷書ヲ添へ其所轄ノ檢事ニ差出シ定式ノ試験ヲ受ク可シ

第廿七條 出願定月 二月 八月 各上半ケ月ヲ以テ限リトナス

第廿八條 試験ノ課目左ノ如シ

- 一 民事ニ關スル法律
- 二 刑事ニ關スル法律

三 訴訟ノ手續
四 裁判ニ關スル諸規則
第二十九條 願書及ヒ履歷書書式

代 言 願

本貫住所 寄留ナル時ハ其寄
留所ヲ記入ス可シ

身 分

氏 名

年 齡

代言營業仕度ニ付御試験之上免許被成下度此段奉願候也

年号月日

右

氏 名 印

司法卿某殿

前書之通出願候ニ付與印致候也

右戸長 又ハ
區長

氏 名 印

履 歷 書

本貫住所 寄留ナル時ハ其寄
留所ヲ記ス可シ

身 分

職 業

氏 名

年 齡

一 地名身分何某ニ隨ヒ何年ヨリ何年迄何學修行何某
ニ隨ヒ何技術ヲ修行

一 何年月日何(官職)ニ任シ何年月日(免官辭職)

一 何年月日何々ノ廉ヲ以テ何應ヨリ賞典ヲ受ク

一 何年月日何々ノ犯罪ニ依リ何ノ刑ヲ受ク

一 何年月日身代限りノ處分ヲ受ケ何年月日辨償ノ義

務ヲ終フ

右之通ニ御座候也

年号月日

氏名印

代言引續願ノ願書モ此式ニ倣フ可シ

引續代言營業仕度候ニ付免許狀御下付被下度此段奉願候也

本貫住所寄留ナル時ハ其寄留所ヲ記ス可シ

免許代言人

年号月日

氏名印

司法卿某殿

●第一号十七年一月廿四日布達

明治十三年^五月司法省甲第二号布達左ノ通改正ス

詞訟又ハ勸解ニ付已ムヲ得ス代人ヲ出サントスル者ハ親屬又ハ相當ノ者ヲ撰ミ管轄裁判所ノ許可ヲ受ク可シ但代人タル者同時ニ二人以上ヨリ二件以上ヲ受任シ其他不適當ノ所爲アリト認ムルハ裁判所ニ於テ之ヲ差止スルコ

トアル可シ

右布達候事

●乙第二十号八年十月廿九日教部省達(神佛諸宗管長)教導職中訴答代言代書等致シ候者有之哉之趣相聞不都合ノ事ニ候以來親戚法類ノ爲ニスルノ外右様ノ儀不相成候條此旨相達候事

○ 裁判所呼出

○ 第五號明治十年一月十七日布告

凡ソ裁判所ノ呼出ヲ受ケタル者疾病等ノ事故アリテ遅參又ハ不參スル時ハ其事故ヲ詳記シ呼出刻限マテニ其裁判所ニ届出スヘシ若シ右刻限ヲ過キテ届出スル歟又ハ無届ニテ遅參不參スル時ハ裁判官ニ於テ直ニ五錢以上拾圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

右布告候事

● 第十九號六年一月十八日達

府縣ニ於テ及所斷候賍贖金ハ司法省へ相納メ收稅法又ハ商賣職業上ニ關スル諸科料ハ大藏省へ可相納旨壬申第七十三號布告ニ及置候所以來賍贖金ハ勿論稅則又ハ職業ニ關シ罰金科料ノ名目ヲ以テ取立候分トモ總テ司法省へ可相納事

但納方ノ儀ハ同省へ可承合事

○賭博犯處分規則

○第一号明治十七年一月四日布告

賭博犯ノ義ハ刑法第二百六十條第二百六十一條ニ明文有之候ヘトモ當分ノ内行政警察ノ處分ニ屬シ東京ハ警視廳其他ハ地方官ヲシテ別紙賭博處分規則ニ依リ取締懲罰ノ事ヲ行ハシム

右奉勅旨布告候事

賭博犯處分規則

第一條 賭博ヲ爲シタル者ハ一年以上四年以下ノ懲罰及ヒ五圓以上二百圓以下ノ過料ニ處ス家屋ヲ貸與シ及ヒ見張ヲ爲シ其他總テ幫助ヲ爲シタル者モ亦同シ博徒ニシテ黨類ヲ招結シ又ハ賭場ヲ開帳シ又ハ兇器携帶シ又ハ四隣ニ横行スル者ハ一年以上十年以下ノ懲罰及ヒ五十圓以上五百圓以下ノ過料ニ處ス

其招結ニ應シタル者ハ賭博ヲ爲サスト雖モ前項ニ依ラ處分ス

第二條 賭具及ヒ賭場ニ現存スル財物ハ何人ノ所有ヲ問ハズ之ヲ沒入ス

第三條 賭博犯ヲ取押フルニハ何人ノ家宅ヲ問ハズ何時タリトモ之ニ立入ルコトヲ得但警察官巡查ハ其證票ヲ携帶スヘシ

第四條 此規則ヲ施行スルノ方法細則ハ警視總監府知事(東京府)縣令ニ於テ便宜之ヲ定メ内務卿ノ許可ヲ得テ施行スルコトヲ得

●第十号十七年一月廿一日達

本年第一號布告ニ據リ懲罰ニ處シタル賭博犯人ハ明治十四年九九月第八十一號達監獄則第一條第五項禁錮ノ刑ニ所セラレタル者ニ準シ服役其他ノ方法共總テ該則ニ依テ所分

ス〜シ此旨相達候事

●第二十七號十七年三月二十四日達

軍人軍屬賭博犯處分ノ義ニ付左ノ通陸海軍兩省へ相達候條爲心得此旨相達候事

陸軍省

海軍省

本年第一號布告賭博犯處分規則ニ依リ處分スベキ者軍人軍屬ニ係ル時ハ憲兵部ノ處分ニ付シ該部ノ處分ニ付スルヲ得サル場合ニ在リテハ陸海軍法衙ノ處分ニ付セシメ候條右規則施行ノ方法細則ハ其省ニ於テ便宜之ヲ定ムベシ此旨相達候事

但軍人軍屬ニアラズシテ軍人軍屬ト共犯ニ係ル者ハ各其事件ヲ管理ス可キ官司ノ處分ニ付スル義ト心得ベシ

●丁第十一号十七年五月三日司法省達

大審院

裁判所

賭博犯人逃走ニ關スル處分ノ義ニ付太政官ヨリ左ノ通御達有之候條此旨相達候事

司法省

別紙內務省上申賭博犯人逃走ニ關スル處分ノ件未書ノ通及指令候條爲心得此旨相達候事

明治十七年四月三十日

賭博犯人逃走ニ關スル處分ノ義ニ付上申

賭博犯人逃走ニ關スル處分ノ義該犯處分規則ニ明文無之所本年一月第十號ヲ以テ懲罰ニ處シタル犯人ハ監獄則第一條第五項禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ニ準シ服役其他ノ方法共總テ該則ニ依テ處分スヘキ旨公達相成候ニ付テハ該犯人入監若クハ留置中逃走シ又ハ其逃走者ヲ藏匿隱避

セシメタル者等ハ刑法第四百二十二條以下各條ニ照シ所分
セラレ候様致度御裁可ノ上ハ右所分方ノ義豫テ司法省へ
御達置相成度此段上申候也

明治十七年四月四日

内務卿山縣有明

上申之趣聞届候事

明治十七年四月三十日

○ 讒謗律

○ 第百拾號明治八年六月廿八日布告
讒謗律別冊之通被定候條此旨布告候事

讒謗律

第一條 凡ソ事實ノ有無ヲ論セス人ノ榮譽ヲ害スヘキノ
行事ヲ摘發公布スル者之ヲ讒毀トス人ノ行事ヲ舉ルニ
非ズン惡名ヲ以テ人ニ加ヘ公布スル者之ヲ誹謗トス著
作文書若クハ畫圖肖像ヲ用ヒ展觀シ若クハ發賣シ若ク
ハ貼示ン人ヲ讒毀シ若クハ誹謗スル者ハ下ノ條例ニ從
テ罪ヲ科ス

第二條 第一條ノ所爲ヲ以テ乘輿ヲ犯スニ涉ル者ハ禁獄
三月以上三年以下罰金五拾圓以上千圓以下
ニ一罰ヲ科ス
以下之ニ倣ヘ

第三條 皇族ヲ犯スニ涉ル者ハ禁獄十五日以上二年半以

下罰金拾五圓以上七百圓以下

第四條 官吏ノ職務ニ關シ讒毀スル者ハ禁獄十日以上二年以下罰金拾圓以上五百圓以下誹謗スル者ハ禁獄五日以上一年以下罰金五圓以上三百圓以下

第五條 華士族平民ニ對スルヲ論セス讒毀スル者ハ禁獄七日以上一年半以下罰金五圓以上三百圓以下誹謗スル者ハ罰金三圓以上百圓以下

第六條 法ニ依リ檢官若クハ法官ニ向テ罪犯ヲ告發シ若クハ証スル者ハ第一條ノ例ニアラス其ノ故造誣告シタル者ハ誣告律ニ依ル

第七條 若シ讒毀ヲ受ルノ事刑法ニ觸ル、者檢官ヨリ其事ヲ糾治スルカ若クハ讒毀スル者ヨリ檢官若クハ法官ニ告發シタル時ハ讒毀ノ罪ヲ治ムルヲ中止シ以テ事案ノ決ヲ俟テ其被告人罪ニ坐スル時ハ讒毀ノ罪ヲ論セ

ス

若シ事刑法ニ觸レズノ單ヘニ人ノ榮譽ヲ害スル者ハ讒毀スルノ後官ニ告發スト雖モ尙ホ讒毀ノ罪ヲ治ム

第八條 凡ソ讒毀誹謗ノ第四條第五條ニ係ル者ハ被害ノ官民自ラ告ルヲ待テ乃チ論ス

○賣淫罰則

○第六十四號明治十四年十二月九日布告

密賣淫ノ義ハ刑法第四百二十五條第十項ニ明文有之候ヘ
トモ當分ノ内其取締懲罰ハ従前ノ通東京ハ警視廳其他ハ
地方官ヘ委任ス

右奉 勅旨布告候事

●乙第九号九年一月廿三日内務省達

本年第一号ヲ以テ改定律例第二百六十七條廢止ノ儀御布
告相或候ニ付テハ過料三十圓懲戒六ヶ月以内適宜ノ方法
ヲ設ケ賣淫取締一層行届候様處分可致此旨相達候事
但取締方法當省ヘ可届事

○懲戒例

○明治十年五月十八日無號太政官達(司法省ヘ)

今般華族懲戒例別紙ノ通改正候條爲心得此旨相達候事

華族懲戒例

第一條 華族ハ國民中貴重ノ地位ニ居ル故ニ其過失或ハ
體面ヲ汚スモノハ假令法律ニ觸レサルモ仍ホ之ヲ懲戒
ス

第二條 懲戒ノ法三種トス第一譴責第二謹慎第三蟄居

第三條 譴責ハ懲戒ノ輕キモノトシテ宮内卿ヨリ譴責書
ヲ下行ス

第四條 謹慎ハ十日ヨリ少ナカラス百日ヨリ多カテサル
間外出ヲ禁シ門戸ヲ鎖シ等親ヲ除クノ外面會ヲ許サズ
其事情ノ重キモノハ位階ヲ降級スルヲモアルヘシ

第五條 蟄居ハ位記ヲ止メ外出ヲ禁シ其家ハ次ノ相續人

ニ命シテ相續セシム

第六條 凡ソ懲戒ノ輕重ハ其事情ヲ酌量シ宮内卿之ヲ審案具狀シ制可テ得テ然後施行ス

第七條 凡華族ノ犯罪法律ニ係ルモノハ裁判官ノ處刑ヲ經シ後宮内卿其輕重ヲ酌量シ事宜ニ應シ仍ホ懲戒ヲ加フル例ノ如シ

●第三十四号九年四月十四日達

今船官吏懲戒例左ノ通相定候條此旨相達候事

官吏懲戒例

第一條 自今私罪ヲ除クノ外ハ官吏職務上ノ過失ハ本屬長官ニ於テ懲戒ノ權ヲ有スヘシ

第二條 懲戒ノ法三種トス第一譴責第二罰俸第三免職

第三條 譴責ハ懲戒ノ輕キモノトシテ本屬長官ヨリ譴責書ヲ付ス

第四條

十三年一月廿一日 達第四號ニテ改正 罰俸ハ一月分ノ十分一ヨリ少

カラス三月分ヨリ多カラサルノ俸ヲ奪フ 俸ヲ徵スルノ半額以下ハ一月俸中ニテ追了シ其以上ハ毎月給俸ノ半額ヲ領置シ數滿チテ大藏省ニ送付ス

第五條 懲戒ヲ以テ免職スル者ハ本屬長官ノ意見ニ從ヒ其奏任ハ具狀奏請シテ之ヲ免シ位記ヲ返上セシム

但懲戒ニ由ルニアラスシテ免職スル者ハ長官旨ヲ論

シ本人ヨリ辭職ノ願ヲ差出サシメ然ル後ニ免許スヘ

シ

第六條 諸省長官ハ所屬奏判任官ヲ懲戒ス

第七條 府縣奏任官ハ太政大臣之ヲ懲戒ス府縣並警視廳判任官ハ其長官之ヲ懲戒ス

第八條 四等以下ノ判事ハ司法卿之ヲ懲戒ス府縣官判事ヲ兼ル者ノ其所屬判任官ニ於ルハ他ノ奏任以上府縣官ノ叶議ヲ得タル後之ヲ懲戒ス

第九條 府縣長官警視長官其所屬判任官ヲ懲戒スルニ其
譴責ヲ專行スルコトヲ得ルヲ除クノ外其罰俸免職ヲ行フ
ハ便宜處分シテ速ニ内務卿ニ届出ヘシ

府縣官判事ヲ兼ル者其所屬判任官ノ罰俸免職ヲ行フハ
便宜處分シテ速ニ司法卿ニ届出ヘシ

第十條 其有心故造私罪ニ入ル者ハ職務上ノ罪ト雖モ之
ヲ司法官ニ移シ本屬長官專ニ處分スルコトヲ得ス

●九年四月十四日番外公達

長官懲戒所分心得

一各長官ハ平生其所屬官ヲ監督シ若シ過失アレハ懲戒例
ニヨリ處分スヘシ
一過失トハ過誤失錯不注意ニ出ル者ヲ云其怠惰ニ出ル者
亦過失トス其素行脩ラスシテ官吏ノ體面ヲ汚ス者亦過
失ニ准シテ懲戒ヲ加フヘシ

一過失ノ事ニ害アル者ハ重キニ從テ論ス其事ニ害アリト
云モ猶改正スヘキ者及ヒ事ニ害ナキ者ハ輕キニ從テ論
ス

但其情狀ニ從ヒ輕重ヲ酌量スルハ專ラ本屬長官ノ所
見ニ任ス

一同僚ノ官吏共同シテ過失ヲ犯ス者ハ主任ノ上官省務ハ
省長寮
司長廳務ハ廳長一科一局一
掛ノ事務ハ各々其主任長 其責ニ任スヘシ而シテ次官以
下遞ニ從テ以テ論ス下官其造意ヲ以テ所行シ猶上官ノ
許可ヲ得タル者ハ上下官共ニ均ク其責ニ任スヘシ下官
職權内ノ事ヲ以テ所行シタル者ニハ上官其責ニ任セス若
シ下官其職權ヲ越ヘ專斷所行シタル者ハ重ニ從テ論ス
一所屬官自ラ過失ヲ覺舉シ進退伺ヲ捧シルモハ本屬長官
之ヲ推糾シ其過失ニ止マル者ハ例ニ依リ處分ス其有心
故造ニ涉リ司法官ニ付スヘシトスル者ハ懲戒例第十條

ニ依リ長官ヨリ之ヲ司法官ニ移ス司法卿若クハ檢事其
檢事ヲ置カサル地方
ニ於テ若シ司法官其有心故造ニ非ス又律ニ觸レサル事
ヲ判スルトキハ之ヲ本屬長官ニ還付シ長官ハ仍ホ懲戒
例ニ依リ處分スル事ヲ得

一懲戒ニ依リ免職スル者ハ二ケ年以上テ經ルノ後ニ非レ
ハ再ヒ收用スル事ヲ許サス

一懲戒ニ依ルト否トヲ論セス凡ソ免職スル者ヲ他ノ官廳
ヨリ收用セントスルキハ必ス舊本屬長官ニ通牒シテ其
意見ヲ問ヒ答復ヲ得ヘシ

一過失ニ由ラスシテ免職スル者ハ長官ヨリ旨ヲ論シ辭表
ヲ捧ケシム其旨ニ違ヒ辭表ヲ捧ケサル者ハ直ニ免職ス
ル事ヲ得

一舊任中過失アル者轉任ノ後發覺若クハ自ラ覺舉スル者
ハ舊任本屬長官ト通牒シテ新任本屬長官ヨリ之ヲ懲戒

スヘシ

●第十四号九年四月廿七日司法省達(檢事)

官吏懲戒例第十條ニ有心故造私罪ニ入ル者ハ職務上ノ罪
ト雖モ之ヲ司法官ニ移シ云々ト有之ニ付テハ以來右等ノ
者ハ司法卿若クハ檢事直ニ之ヲ受ケ司法卿若クハ檢事
ニ於テ其有心故造ニ非ラス又律ニ觸レサルコト判スルキ
ハ之ヲ本屬長官ニ還付シテ其處分ニ任スヘキ儀ト可相心
得此旨相達候事

●九年六月八日太政官番外達院省使廳府縣

本年^四月第三十四号達官吏懲戒例ノ儀ニ付尙又左ノ通相達
候事

一准官吏並ニ等外吏ハ本例ニ照シテ處分シ備其他種々ノ
名義ヲ以テ公事ニ關スル者ハ本屬長官ノ見込ヲ以テ適
宜處分スヘシ

一官國幣社神官並ニ教導職ノ過失發見スル時ハ所在地方官ヨリ其狀ヲ具シテ教部省ヘ届出ヘシ

(十三年三月達第二十三號ニテ第三項廢止)

一巡查及ヒ學校其他諸工場等ノ如キ別ニ懲罰規則有之分ハ本例ノ限ニアラス

一民費ヲ以テ給俸ニ充ル者ノ罰俸ハ各其民費ニ割戻スヘシ

○乙第九十二号九年八月五日内務省達

巡查懲罰例別紙ノ通改正候條此旨相達候事

巡查懲罰例

第一條 凡ソ職務ノ規則ニ違背シ及ヒ怠慢失誤アル者ハ其情狀ヲ審案シ俸給一ヶ月百分ノ一ヨリ少カラス一ヶ月ヨリ多カラサル罰金ヲ科シ輕キ者ハ呵責ニ止ム

第二條 凡ソ犯狀ノ職務ヲ耻カシムルニ係ル者ハ免職ス

第三條 凡ソ罰金未ダ完納セサル中免職死亡ニ係ル者ハ追徴スルコトヲ免ス

第四條 凡ソ罰金ハ毎月ノ俸金ヲ控除シテ完納セシム但シ月俸ノ三分一ヲ過クルヲ得ス

第五條 凡ソ官物ヲ遺失及ヒ毀損スル者ハ相當ノ罰金ヲ科シ尙ホ其代價ヲ賠償セシム

●乙第十七号十六年四月二十日内務省達
看守懲罰ノ義ハ自今巡查懲罰例ニ準據スヘシ此旨相達候事

○役威調金

○明治四年十二月二十七日布告
各地方諸官員我役威ヲ以テ内外人民ヨリ調金爲致候様ノ儀有之候テハ以ノ外ノ事ニ付自今堅ク被禁止候條萬一心得違ノ者有之候節ハ貸借双方共急度御沙汰可有之候事

○復讐

○第三十七號明治六年二月七日布告
人ヲ殺スハ國家ノ大禁ニシテ人ヲ殺ス者ヲ罰スルハ政府ノ公權ニ候所古來ヨリ父兄ノ爲ニ讐ヲ復スルヲ以テ子弟ノ義務トナスノ風習アリ右ハ至情不得止ニ出ルト雖モ畢竟私憤ヲ以テ大禁ヲ破リ私義ヲ以テ公權ヲ犯ス者ニシテ固ヨリ擅殺ノ罪ヲ免レヌ加之甚シキニ至リテハ其事ノ故誤ヲ問ハス其利ノ當否テ顧ミヌ復讐ノ名義ヲ狹ニ濫リニ相構害スルノ弊往々有之甚以不相濟事候依之復讐嚴禁被仰出候條今後不幸至親ヲ害セラル、者於有之事實ヲ詳ニシ速ニ其筋ヘ可訴出候若無其儀舊習ニ泥ミ擅殺スルニ於テハ相當ノ罪料ニ可處候條心得違無之様可致事

○勳章年金褫奪

○第二十二号明治十六年六月廿九日布告

勳章ヲ有スル者其榮譽ヲ汚辱スルノ所爲アル時ハ勳章及年金ヲ褫奪ス外國勳章ハ其佩用免許狀ヲ沒收ス

勳章ヲ有スルモノ重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留若クハ保釋責付セラレタル時ハ勳章ヲ佩用スルコトヲ得ス又之ニ屬スル禮遇特權及年金ヲ受クルコトヲ得ス

右奉 勅旨布告候事

○徵兵令

○第四十六号明治十六年十二月廿八日布告

徵兵令別冊之通改正ス

右奉 勅旨布告候事

徵兵令

第一章 總則

第一條 全國ノ男子年齡滿十七歲ヨリ滿四十歲迄ノ者ハ總テ兵役ニ服ス可キモノトス

第二條 兵役ハ陸軍海軍共ニ常備兵役後備兵役及ヒ國民兵役トス

第三條 常備兵役ハ別チテ現役及ヒ豫備役トス其現役ハ三個年ニシテ年齡滿二十歳ニ至リタル者之ニ服シ其豫備役ハ四個年ニシテ現役ヲ終リタル者之ニ服ス

第四條 後備兵役ハ五個年ニシテ常備兵役ヲ終リタル者

之ニ服ス

第五條 國民兵役ハ年齡滿十七歲ヨリ滿四十歲迄ノ者ニ

シテ常備兵役及ヒ後備兵役中ニ在ラサル者之ニ服ス

第六條 各兵役ノ期限已ニ滿ルト雖モ戰時或ハ事變ニ際

スルトキ若クハ臨時ニ演習或ハ觀兵ノ舉アルトキ若ク

ハ航海中或ハ外國駐劄中ハ其期ヲ延スコトアル可シ

第七條 重罪ノ刑ニ所セラレタル者ハ兵役ニ服スルコト

ヲ許サス

第二章 服役

第八條 陸軍現役兵ハ毎年所要ノ人員ニ應シ壯丁ノ身材

藝能職業ニ從ヒ步兵騎兵砲兵工兵輜重兵及ヒ雜卒職工

ニ區別シ抽籤ノ法ニ依リ當籤ノ者ヲ以テ之ニ充ツ

海軍現役兵ハ海軍所要ノ人員ニ應シ沿海地方及ヒ島嶼

ノ人民ヲ調査シ海軍ニ適スル職業ニ從ヒ水兵火夫職工

等ニ區別シ抽籤ノニ法依リ當籤ノ者ヲ以テ之ニ充ツ但

海軍志願兵徵募規則ニ依リ就役スル者ハ本令ノ限ニ在

ラス

第九條 陸軍雜卒ノ現役期限ハ其職務ニ因リ之ヲ短縮ス

ルコトアル可シ但常備兵役ノ全期ハ之ヲ減スルコトナ

シ

第十條 年齡二十歲ニ滿タスト雖モ滿十七歲以上ノ者ハ

現役ヲ志願スルコトヲ得

第十一條 年齡滿十七歲以上滿二十七歲以下ニシテ官立

府縣立學校小學校ヲ除クノ卒業證書ヲ所持シ服役中食料被服

等ノ費用ヲ自辨スル者ハ願ニ因リ一個年間陸軍現役ニ

服セシム

其技藝ニ熟達スル者ハ若干月ニシテ歸休ヲ命スルコト

アル可シ但常備兵役ノ全期ハ之ヲ減スルコトナシ

第十二條 現役中殊ニ技藝ニ熟シ行狀方正ナル者及ヒ官立公立學校小學校ヲ除クノ歩兵操練科卒業證書ヲ所持スル者ハ其期未タ終ラスト雖モ歸休ヲ命スルコトアル可シ

第十三條 豫備兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ之ヲ召集シ常備隊ヲ充實シ又補充隊ニ編制ス平常ニ在テハ技藝復習ノ爲メ毎年一度六十日以内之ヲ召集シ又兵員實查ノ爲メ毎年一度點呼ヲ爲ス但海軍豫備兵ハ技藝復習ノ爲メ召集スルコトナシ

第十四條 後備兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ豫備兵ニ次テ之ヲ召集シ常備兵ノ後援ト爲ス平常ニ在テ其技藝復習ノ爲メニ召集シ及ヒ兵員實查ノ爲メニ點呼ヲ爲スコト豫備兵ニ同シ

第十五條 國民兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ後備兵ヲ召集シ仍ホ兵員ヲ要スルトキニ限り之ヲ召集シ隊伍ニ編制

シテ軍役に充ツ

第三章 免除及ヒ猶豫

第十六條 兵役ヲ免除スルハ癡疾又ハ不具等ニシテ徵兵檢査規則ニ照シ兵役ニ堪ヘサル者ニ限ル

第十七條 左ニ掲クル者ハ徵集ヲ猶豫ス但其年補充員不足スルトキ又ハ戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルトキハ之ヲ徵集ス

第一項 兄弟同時ニ徵集ニ應スル者ノ内一人及ヒ現役兵ノ兄或ハ弟一人

第二項 現役中死没又ハ公務ノ爲メ負傷シ若クハ疾病ニ罹リ免役シタル者ノ兄或ハ弟一人

第三項 戶主年齢滿六十歳以上ノ者ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第四項 戶主癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營

ムコト能ハサル者ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第五項 戸主

第十八條 左ニ掲グル者ハ其事故ノ存スル間徵集ヲ猶豫ス

第一項 教正ノ職ニ在ル者

第二項 官立府縣立學校小學校ヲ除クノ卒業證書ヲ所持スル者ニシテ官立公立學校教員タル者

第三項 官立大學校及ヒ之ニ準スル官立學校本科生徒

第四項 陸海軍生徒海軍工夫

第五項 身幹未タ定尺ニ滿タサル者

第六項 疾病中或ハ病後ノ故ヲ以テ未タ勞役ニ堪ヘサル者

第七項 學術修業ノ爲メ外國ニ寄留スル者

第八項 禁錮以上ニ該ル可キ刑事被告人ト爲リ裁判未決ノ者

第九項 公權停止中ノ者

第十九條 官立府縣立學校小學校ヲ除クニ於テ修業一個年以上ノ課程ヲ卒リタル生徒ハ六個年以内徵集ヲ猶豫ス

第二十條 左ニ掲グル者ハ豫備兵ニ在ルト後備兵ニ在ルトヲ問ハス復習點呼ノ爲メ召集スルコトナシ但戰時若クハ事變ニ際シテハ太政官ノ決裁ヲ經テ召集スルコトアル可シ

第一項 官吏判任以上及ヒ戸長

第二項 教導職試補ヲ除ク

第三項 官立公立學校教員

第四項 府縣會議員

第五項 官立府縣立醫學校ノ卒業證書ヲ所持シテ醫

術開業ノ者

第廿一條 官省院廳府縣ニ於テ餘人ヲ以テ代フ可カラサル技術ノ職ヲ奉スル者ハ太政官ノ決裁ニ依テ徵集ヲ猶豫スルコトアル可シ

第廿二條 左ニ掲グル者ハ第十七條ニ照シテ徵集ヲ猶豫スルノ限ニ在ラス

第一項 附籍戸主及ヒ附籍戸主ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第二項 癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ

非スシテ嗣子承祖ノ孫若クハ相續人ヲ罷メ更ニ定メタル嗣子承祖ノ孫

第三項 年齢六十歳未満ノ戸主癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ非スシテ戸主ヲ罷メ年齢六十歳以上ノ者ニシテ其跡ヲ繼ギタル戸主ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第四項 分家シ又ハ絶家若クハ廢家ヲ再興シタル戸主及ヒ其戸主ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第五項 嗣子承祖ノ孫失踪シテ五個年ヲ經サル者ノ跡ニ定メタル嗣子承祖ノ孫

第六項 第二項第三項第四項ニ當ル嗣子或ハ承祖ノ孫ニシテ戸主癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ非スシテ戸主ヲ罷メ其跡ヲ繼ギタル戸主

第七項 年齢六十歳未満ノ者癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ非スシテ戸主ヲ罷メ其跡ヲ繼ギタル戸主

第八項 嗣子承祖ノ孫又ハ相續人廢疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ所セラレタルニ非スシテ戸主ノ死亡跡若クハ戸主ヲ罷メタル跡ヲ繼カス他ノ者ニシテ其跡ヲ繼キタル戸主

第九項 戸主失踪シテ五個年ヲ經サル者ノ跡ヲ繼キタル戸主

第廿三條 第十八條第一項第二項第三項第四項陸海軍生徒ヲ除ク

第十九條第二十一條ニ當ル者ト雖モ第三十五條ニ示シタル徵兵各自届出期限即チ九月十六日以後ニ係ル者ハ徵集ヲ猶豫スルノ限ニ在ラス

第四章 徵兵區及ヒ抽籤

第廿四條 徵兵區ハ軍管師管及ヒ府縣ノ區域ニ從フ其郡管ニ從フモノヲ軍管徵兵區ト爲シ師管ニ從フモノヲ師

管徵兵區ト爲シ府縣ニ從フモノヲ府縣徵兵區ト爲ス但シ府縣ノ管地兩師管ニ分屬スルモノハ師管毎ニ一區ヲ設ク

軍管及ヒ師管ノ徵兵區域ハ別表ニ掲ク

第二十五條 各鎮臺ニ屬スル歩兵ハ其師管徵兵區限リ其他ノ諸兵ハ其軍管徵兵區限リ之ヲ徵集ス但現役徵員及ヒ其補充員不足スルトキ歩兵ハ他ノ師管其他ノ諸兵ハ他ノ軍管徵兵區ヨリ之ヲ補フ

海軍及ヒ近衛ノ諸兵ハ各軍管徵兵區ニ配當シテ全國ヨリ之ヲ徵集ス

第廿六條 抽籤ハ各府縣徵兵區限リ之ヲ行フモノトス府縣徵兵區ニ於テハ其區壯丁ノ身體検査終リタル後兵役ニ適ス可キ人員ノ身材職業ニ從ヒ兵種ヲ區別シ番號ヲ定メ抽籤セシム

第廿七條 籤ハ一郡區毎ニ籤丁ノ人撰テ以テ一名乃至三名ノ總代人ヲ出シテ之ヲ抽カシム

第廿八條 抽籤ノ法ハ籤丁ノ數ニ應シ籤札ニ兵種番號ヲ記シ籤箱ニ納シ籤簿掛ノ面前ニ置キ籤丁名簿ノ順序ニ從ヒ其氏名ヲ呼ビ總代人ニ之ヲ抽カシメ籤簿掛ハ抽籤ノ正否ヲ監シ抽キ舉クル所ノ番號ヲ高聲ニ呼ハシメ其籤札ヲ受取り籤簿ニ氏名番號ヲ記シ籤札ハ總代人ニ交付ス

第廿九條 籤ハ其番號現役徵員ノ數ニ滿ツル迄ヲ以テ現役籤トシ其餘ヲ以テ補充籤トス

第五章 補充員及ヒ豫備徵員

第三十條 補充員ハ補充籤ヲ抽キタル者ヲ以テ一個年間之ニ充ツ其期限内現役兵欠員スルトキ又ハ戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルトキ其番號ノ順序ニ從ヒ之ヲ

徵集ス

補充員ノ數ハ概ホ現役徵員五分ノ二ヨリ少カラサルモノトス

第卅一條 補充員ニシテ其期限内徵集ノ命ナキ者及ヒ第十八條第三項ノ生徒ニシテ二箇年以上ノ課程ヲ卒リタル者ハ年齡滿二十七歲迄之ヲ第一豫備徵員トス

第卅二條 第十七條ニ當ル者ニシテ其年徵集ノ命ナキ者第十八條第廿一條ニ當ル者ニシテ七個年間其事故ノ存スル者及ヒ第一豫備徵員ヲ終リタル者年齡滿卅二歲迄ハ之ヲ第二豫備徵員トス但第十七條ニ當ル者第二豫備徵員ト爲リタル後六個年間ニ該條ニ掲クル資格ヲ失ヒタルトキハ現役ニ徵集ス

第卅三條 豫備徵員ハ戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルトキ之ヲ徵集ス但第二豫備徵員ヲ徵集スルハ後備兵

ヲ召集スルトキニ限ル

第六章 雜則

第卅四條 毎年一月ヨリ十二月迄ニ年齡滿十七歳ト爲ル者ハ其年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ニ戶主本人戶主身以下戶主トアルモノ皆同シヨリ本人ノ氏名族籍住所誕生ノ年月日及ヒ職業ヲ記載シ本籍ノ戶長ニ届出可シ

第卅五條 毎年一月ヨリ十二月迄ニ年齡滿二十歳ト爲ル者ハ其年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ニ書面ヲ以テ戶主ヨリ本籍ノ戶長ニ届出可シ若シ届出ノ後翌年四月十日迄ニ異動ヲ生シタルトキハ其事由ヲ詳記シ三日以内ニ本籍ノ戶長ニ届出可シ但二十歳未滿ニシテ現ニ服役スル者ハ届出ルニ及ハス

第卅六條 第十七條ニ當ル者其資格ヲ失ヒ第十八條第十九條第二十一條ニ當ル者其事故止ニ及ヒ第三十二條但

書ニ當ル異動ヲ生シタルトキハ其事由ヲ詳記シ其年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ニ戶主ヨリ本籍ノ戶長ニ届出可シ但九月十六日以後翌年四月十日以前本條ニ當ル者ハ三日以内ニ本籍ノ戶長ニ届出可シ

第卅七條 他ノ府縣ニ寄留スル者其地ニ於テ徵集ニ應ヒント欲スルトキハ其地ニ居住スル者戶主ヲ以テ証人ト爲シ八月十五日迄ニ戶主ヨリ其旨ヲ本管廳ニ願出可シ但第三十五條ノ届書ハ寄留地ノ戶長ニ差出ス可シ

第卅八條 現役兵在營在艦中ハ定額ノ日給ヲ與ヘ服食等ヲ給ス

第卅九條 疾病或ハ犯罪等ニテ期限ニ際シ入營シ難キ者ハ其事由ヲ詳記シ其疾病ニ懼ル者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ即日戶長ニ届出可シ其事故止ムトキ亦同シ

第四十條 第三十九條ニ掲クル者其年九月一日ニ至ルモ

事故猶止マサルトキハ之ヲ翌年廻シノ者ト爲シ翌年更ニ檢査ヲ遂ケ他ノ徵員ニ先チ徵集ス可シ但戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルトキハ翌年徵集ノ期ヲ待タズ徵集ス

第四十一條 兵役ヲ免レンカ爲メ身體ヲ毀傷シ疾病ヲ作爲シ其他詐僞ノ所爲ヲ用ヒ又ハ逃亡若クハ潛匿シタル者又ハ正當ノ故ナク檢査所ニ參會セス又ハ第三十五條第三十六條ノ届出ヲ怠リタル者ハ抽籤ノ法ヲ用ヒス直ニ現役ニ徵集シ又ハ翌年檢査ヲ遂ケ第四十條ニ掲グル者ニ先チ抽籤ノ法ヲ用ヒス徵集ス

第四十二條 常備現役年期ノ計算ハ總テ其入營年ノ四月二十日 第四十一條ニ掲クヨリ起算シ豫備役及ヒ後備役年期ノ計算ハ其定例編入ス可キ年ノ四月二十日ヨリ起算ス但禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレ又ハ逃

亡シタル者其刑期中ノ日數及ヒ逃亡中ノ日數ハ服役年期ニ算入セス

第四十三條 第三十四條第三十五條第三十六條第三十九條ノ届出ヲ爲サ、ル者及ヒ檢査時日ノ指定ヲ受ケ正當ノ故ナク其場所ニ參會セサル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十四條 兵役ヲ免レンカ爲メ逃亡シ又ハ潛匿シ若クハ身體ヲ毀傷シ疾病ヲ作爲シ其他詐僞ノ所爲アル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四十五條 本令施行ノ爲メニ要スル規則ハ別ニ布達ヲ以テ之ヲ定ム

軍管師管		國名	
第	第	第	第
三	第	一	第
後佐渡	陸前ノ内 柴田郡 仙臺區 名取郡 磐城 岩代 羽前 越	武藏ノ内 本所區 深川區 南葛飾郡 安房 北葛飾郡 南埼玉郡 北埼玉郡	武藏ノ内 麴町區 神田區 日本橋區 京橋區 牛込區 小石川區 本郷區 下谷區 芝區 麻布區 赤坂區 四谷區 北豐島郡 新坐郡 淺草區 横濱區 荏原郡 南豐島郡 南足立郡 北足立郡 東多摩郡 西多摩郡 南多摩郡 入間郡 高麗郡 比企郡 横見郡 秩父 北多摩郡 久其岐郡 桶樹郡 都筑郡 郡 兒玉郡 那珂郡 賀美郡 大里郡 檜羅郡 榛澤郡 相模 甲斐 伊豆 上野 信濃ノ内 男衾郡
第	第	第	第
七	第	六	第
山城大和河内和泉近江伊賀	攝津ノ内 東區 西區 南區 紀伊ノ内 北區 東成郡 住吉郡	尾張ノ内 東春日井郡 西春日井郡 美濃 加賀 能登 越中 飛騨 越前	尾張ノ内 名古屋區 愛知郡 葉栗郡 中島郡 海東郡 海西郡 知多郡 信濃ノ内 東筑摩郡 西筑摩郡 上伊那郡 下伊那郡 南安曇郡 北安曇郡 諏訪郡 那郡 三河 遠江 駿河 伊勢 志摩 紀伊ノ内 南牟婁郡 牟婁北郡

第	第	第	第
七	第	六	第
山城大和河内和泉近江伊賀	攝津ノ内 東區 西區 南區 紀伊ノ内 北區 東成郡 住吉郡	尾張ノ内 東春日井郡 西春日井郡 美濃 加賀 能登 越中 飛騨 越前	尾張ノ内 名古屋區 愛知郡 葉栗郡 中島郡 海東郡 海西郡 知多郡 信濃ノ内 東筑摩郡 西筑摩郡 上伊那郡 下伊那郡 南安曇郡 北安曇郡 諏訪郡 那郡 三河 遠江 駿河 伊勢 志摩 紀伊ノ内 南牟婁郡 牟婁北郡

四 第		五 第		六 第		七 第
八	第	十第	九第	二十第	一十第	
攝津ノ内	神戸區 西成郡 島上郡 島下郡 八郡 郡 菟原郡 武庫郡 川邊郡	阿波 讚岐 伊豫 土佐	安藝 備後 備中 出雲 石見 隱岐 周防 長門	肥後 日向 大隅 薩摩 沖繩	豐前 豐後 筑前 筑後 肥前 壹岐 對島	渡島 後志 石狩 天鹽 北見 膽振 日高 十勝 釧路 根室 千嶋

軍管ハ軍團ノ諸兵師管ハ師團ノ諸兵ヲ徵集ス

徵兵ハ現今沖繩縣ニ之ヲ行ハス北海道ニ於テハ第七軍管ノ鎮臺ヲ設クル迄函館縣管下函館江差福山三個所ヲ限リ之ヲ行ヒ第二軍管ノ管轄ニ屬セシム

○ 徵兵事務條例

○第拾八號十七年七月十九日布達
徵兵事務條例別冊ノ通相定ム
右布達候事

徵兵事務條例目錄

- 第一章 徵兵事務官及ヒ其職掌
- 第二章 徵兵檢査所及ヒ徵兵署
- 第三章 各自届出
- 第四章 下 調
- 第五章 徵員配當
- 第六章 檢査準備
- 第七章 檢 査
- 第八章 抽籤準備
- 第九章 抽 籤

第十章 簿冊表面調製

- 第十一章 現役兵編入順序
 - 第十二章 新兵入營前ノ扱
 - 第十三章 歸休歸省
 - 第十四章 補充員及ヒ豫備徵員
 - 第十五章 一年志願兵
 - 第十六章 臨時徵兵事務
 - 第十七章 雜 則
 - 第十八章 附 則
- 徵兵事務條例

第一章 徵兵事務官及ヒ其職掌

- 第一條 徵兵事務官ハ左ノ如シ
- 一 鎮臺後備軍司令官
- 二 營所後備軍司令官

- 三 府縣駐在官
 - 四 郡區駐在官
 - 五 醫官
 - 六 府知事縣令
 - 七 府縣兵事課長
 - 八 郡區長
- 第二條 鎮臺後備軍司令官ハ其軍管内徴兵ノ事ヲ掌ル
- 第三條 營所後備軍司令官ハ其師管内徴兵ノ事ヲ掌リ又毎年新兵徴集ノ際府縣徴兵署ヲ巡行シ兵種ノ撰定簿冊ノ審査兵役免除ノ處分ヲ爲シ徴集猶豫ニ係ル者ハ府知事縣令ト商議シ之ヲ決裁ス但鎮臺所在地ニハ營所後備軍司令官ヲ置カサルヲ以テ鎮臺後備軍司令官其職掌ヲ兼攝スルモノトス
- 第四條 府縣駐在官ハ其府縣内徴兵ノ事ヲ掌リ又毎年新

- 兵徴集ノ際醫官及ヒ府縣兵事課長ト共ニ徴兵検査所ヲ巡行シ壯丁検査ノ事ヲ掌ル
- 第五條 郡區駐在官ハ其郡区内徴兵ノ事ヲ掌リ又毎年新兵徴集ノ際名簿調査ノ事ヲ掌ル
- 第六條 醫官ハ毎年新兵徴集ノ際一等軍醫以下軍醫試補以上ヲ以テ之ニ充ツ
- 一等軍醫ハ後備軍司令官ニ從ヒ府縣徴兵署ヲ巡行シ壯丁ノ身材骨格兵役ニ適スルヤ否ヲ検査スルコトヲ掌ル
- 二等軍醫以下軍醫試補以上ハ府縣駐在官ト共ニ徴兵検査所ヲ巡行ス其職掌一等軍醫ニ同シ
- 第七條 毎年新兵徴集ノ際前諸條官員ノ外海軍將校ヲシテ後備軍司令官ノ事務ニ參セシムルコトアル可シ
- 第八條 府知事縣令ハ管内徴兵ノ事ヲ掌リ又毎年新兵徴集ノ際府縣徴兵署ニ於テ後備軍司令官ト商議シ徴集猶

豫ノ裁決ヲ掌ル

第九條 府縣兵事課長ハ其府縣内徴兵ノ事務ヲ整理シ又毎年新兵徴集ノ際府縣駐在官ト共ニ徴兵検査所ヲ巡行シ検査ノ事務ヲ補助ス

第十條 郡區長ハ郡区内徴兵ノ事ヲ掌リ又毎年新兵徴集ノ際名簿調製ノ事ヲ掌ル

第十一條 毎年新兵徴集ノ際師管徴兵區ノ諸記録ハ後備軍司令部書記ヲシテ之ヲ掌ラシム

検査及ヒ抽籤ノ筆記ハ筆生ヲシテ之ヲ掌ラシメ身體検査ノ記録ハ地方醫員ヲシテ之ヲ掌ラシメ又身體検査ノ補助ヲ爲サシムルコトアル可シ

醫員筆生ハ府知事縣令ノ撰ヲ以テ命スルモノトス

第十二條 徴集猶豫ノ事ニ係リ後備軍司令官ト府知事縣令ト商議整ハサルトキハ各其事由ヲ具シ陸軍卿ニ伺出

可シ但後備軍司令官ハ其所管長官ヲ經由ス可シ

第二章 徴兵検査所及ヒ徴兵署

第十三條 壯丁ノ検査ヲ施行スル爲メ府縣管地ノ廣狹及ヒ壯丁ノ多寡ニ應シ集合便宜ノ地ヲ撰ニ若干ノ徴兵検査所ヲ設ク可シ

第十四條 各府縣徴兵區ニ於テ其事務ヲ整理スル爲メ毎年新兵徴集ノ期ニ先チ府縣廳所在ノ地又ハ管内便宜ノ地ニ一ノ徴兵署ヲ設ク可シ但一府縣ノ管地兩師管ニ分屬スルモノハ每師管ニ一ノ徴兵署ヲ設ク可シ

第十五條 徴兵検査所及ヒ徴兵署ハ毎年新兵徴集中開クモノニシテ該事務竣レハ之ヲ閉ツ可シ

第三章 各自届出

第十六條 徴兵令第三十四條ノ届書ハ第一書式第三十五條ノ届書ハ第二書式第三十六條ノ届書ハ第三書式ニ據

リ之ヲ認メ戸長ニ差出ス可シ但第三十五條ノ届書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

- 一 徴兵令第七條ニ當ル者ハ刑名宣告書寫
- 二 徴兵令第十七條第一項第二項ニ當ル者ハ事由ヲ記シタル詳細書第三項第五項ニ當ル者ハ第四書式ノ事由書及ヒ戸籍寫第四項并ニ同令第二十二條ノ諸項ニ當ル癡疾不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサル爲メ徵集猶豫ニ關スル者ハ事由ヲ記シタル詳細書及ヒ第五書式ノ醫師診斷書并ニ同郡區内現役兵ノ戸主タル者二人以上ノ保證書及ヒ戸籍寫重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ刑名宣告書寫
- 三 徴兵令第十八條第一項ニ當ル者ハ辭令書寫第二項ニ當ル者ハ卒業證書寫及ヒ辭令書寫第三項第

- 四項ニ當ル者ハ學校長若クハ所屬長ノ證明書第七項ニ當ル者ハ地名校名及ヒ修業ノ學科并ニ入校ノ年月日等記載ノ書及ヒ公使又ハ領事ノ證明書第八項ニ當ル者ハ檢察官ノ證明書第九項ニ當ル者ハ刑名宣告書寫
- 四 徴兵令第十九條ニ當ル者ハ學科并ニ等級ヲ記シタル學校長又ハ所屬長ノ證明書
- 五 徴兵令第二十一條ニ當ル者ハ決裁書ノ寫
- 第十七條 各自届出ヲ爲スニ當リ戸主旅行又ハ外國寄留等ニテ届出ヲ爲ス能ハサルトキハ本人又ハ親族ノ者ヨリ届出可シ
- 第十八條 各自届出ヲ終ルノ後抽籤ノ前他ノ府縣ニ轉籍スル者ハ三日以内ニ舊住地新住地雙方ノ戸長ニ届出可シ

第四章 下調

第十九條 毎年九月一日以前戸長ハ各自届出ヲ爲ス可キ者ヲシテ徴兵令第三十四條第三十五條第三十六條ノ届出ヲ怠ラシメサル様注意ス可シ

第二十條 戸長届書ヲ領收セハ其町村ノ戸籍ニ照シ届渡ノ者ナキヤ否ヲ調査シ國民兵入籍者ト徴兵相當者トチ分チ徴兵相當者ノ各自姓名ノ頭ニ記載シタル箇條并ニ事由書或ハ証書等相違ナキヤ否ヲ審査シ其届書ニ署名押印シ更ニ徴兵令第七條第十七條第十八條第十九條第二十一條ニ當ル者ト検査ヲ受ク可キ者トチ區別シ國民兵入籍者ノ届書ト共ニ書類目錄ヲ添ヘ毎年九月二十五日迄ニ郡區長ニ差出ス可シ但徴兵令第三十五條但書ニ當ル者ハ戸長之ヲ調査シ其族職業氏名住所誕生年月日及ヒ隊號ヲ記シ本條ノ書類ト共ニ郡區長ニ差出ス可シ

第廿一條 戸長ハ検査ヲ受ク可キ者ノ戸籍ニ基キ人別表

第六 書式ニ葉ヲ製シ各自届書ト共ニ郡區長ニ差出ス可シ但人別表用紙ハ各自届出ノ季節ニ先チ府縣廳ヨリ之ヲ下付ス可シ

第廿二條 各自届出ノ後身上ノ異動ヲ届出ルトキハ戸長之ヲ調査シ三日以内ニ郡區長ニ差出ス可シ

第廿三條 郡區長ハ戸長ヨリ差出ス所ノ各自届書人別表其他諸書類ノ成規ニ適スルヤ否ヲ點檢シ然ル後壯丁名簿第七 簿書式及ヒ壯丁異動名簿第八 簿書式ヲ製シ卷末ニ署名押印シ各自届書人別表其他諸書類ト共ニ十月十五日迄ニ之ヲ郡區駐在官ニ送致ス可シ

第廿四條 郡區駐在官ハ郡區長ヨリ送致スル所ノ名簿并ニ諸書類ヲ點檢シ其郡區内ノ壯丁中遺漏或ハ差違ナキヤ否ヲ調査シ又人別表備考區畫ニ記載スル件々ノ適否

ヲ敷查シ訂正加書シ然ル後名簿ノ卷末ニ署名押印シ諸書類ト共ニ郡區長ニ返付ス可シ

第廿五條 郡區長ハ郡區駐在官ヨリ返付スル所ノ名簿ニ各自届書人別表其他諸書類ヲ添ヘ十月二十五日迄ニ之ヲ府縣廳ニ差出ス可シ

第廿六條 壯丁名簿調製ノ際郡區長ハ人別表備考區畫ニ記載スル件々ノ適否ヲ覈查シ訂正加書ス可シ

第廿七條 寄留地ニ於テ徵集ニ應シ又ハ檢査ヲ受ケント欲スル者ハ該部内ノ者ト混セサル爲メ他府縣ヨリ寄留部ト題シ本籍地ニ於テハ他府縣ニ寄留ノ部ト題シ之ヲ別簿ニ作ル可シ

第廿八條 郡區長ハ壯丁名簿壯丁異動名簿整頓前二十二條ニ據リ身上ノ異動届書ヲ戸長ヨリ差出ストキハ之ヲ調査シ名簿ヲ訂正ス可シ若シ名簿整頓後ニ係ルトキハ

府縣廳又ハ徵兵隊或ハ檢査所ニ送ル可シ但徵兵令第三十四條ノ各自届出後身上異動ノ届書ハ三日以内ニ府縣廳ニ差出ス可シ

第廿九條 他府縣ニ籍ヲ轉スルノ異動届書ハ郡區長ヨリ府縣廳ニ差出該廳ヨリ新住地府縣廳ニ通牒ス可シ

第三十條 郡區長ハ壯丁名簿壯丁異動名簿ヲ府縣廳ニ差出シタル後國民兵入籍者ノ届書ニ據リ國民兵名簿第九書式ヲ調製シ卷末ニ署名押印シ各自届書ト共ニ十月三十日迄ニ之ヲ郡區駐在官ニ送致ス可シ

第卅一條 郡區駐在官ハ郡區長ヨリ送致スル所ノ名簿ヲ點檢シ其郡區内ノ國民兵入籍者ノ遺漏或ハ差違ナキヤ否ヲ調査シ然ル後卷末ニ署名押印シ郡區長ニ返付シ郡區長ハ各自届書ト共ニ十一月十日迄ニ之ヲ府縣廳ニ差出ス可シ

第五章 徵員配當

第卅二條 毎年徵集ス可キ陸軍新兵ノ員數ハ陸軍卿之ヲ告示シ海軍新兵ノ員數ハ海軍卿之ヲ告示ス可シ

第卅三條 鎮臺司令官ハ其告示ニ基キ後備軍司令官ヨリ

差出ス所ノ人員ヲ率トシ軍管徵集人員配當表第十書式ヲ作

リ之ヲ陸軍省ニ開申シ又管内府縣廳及ヒ府縣駐在官ニ通牒ス可シ府縣廳ニ於テハ之ヲ管内ニ告示ス可シ

第六章 檢査準備

第卅四條 府縣廳ニ於テハ毎年十一月一日ヨリ徵兵署ヲ開設シ府縣駐在官醫官府縣兵事課長地方醫員及ヒ學生出頭シ徵兵檢査ノ準備ヲ爲ス可シ

第卅五條 府縣廳ニ於テハ各自屈書人別表其他諸書類ノ成規ニ適スルヤ否ヲ審査シ戶籍帳ト照較シ遺漏又ハ差違ナキヤ否ヲ調査シ然ル後徵兵署ニ送致ス可シ

第卅六條 府縣駐在官ハ府縣廳ヨリ徵兵署ニ送ル所ノ諸書類ノ成規ニ適スルヤ否ヲ調査シ又壯丁名簿壯丁異動名簿中徵集ニ應ス可キ者ノ總人員ヲ營所後備軍司令官ニ差出ス可シ但營所後備軍司令官ハ之ヲ一師管ニ取經メ鎮臺後備軍司令官ヲ經テ鎮臺司令官ニ呈ス可シ

第卅七條 府縣駐在官ハ前條書類調査ノ後府縣兵事課長ト商議シ管地ノ廣狹及ヒ壯丁ノ多寡ニ應シ檢査所並ニ巡回日割ヲ定メ其表面第十一書式ヲ製シ後備軍司令官ヲ經テ鎮臺司令官ニ府縣兵事課長ハ府知事縣令ニ之ヲ開申ス可シ

第卅八條 檢査所並ニ巡回ノ日割已ニ定マルトキハ府縣廳ヨリ郡區長及ヒ戶長ニ達シ戶長ハ之ヲ其町村內檢査ヲ受ク可キ者ニ達シ置キ徵集ノ日時ニ至レハ壯丁ヲ引纏メ指定ノ場所ニ出頭ス可シ

第三十九條 府縣兵事課長ハ徵兵署ニ於テ筆生ヲシテ人別表ニ基キ検査表第十二書式ヲ製セシメ検査ノ席ニ備ヘ置ク可シ但検査表用紙ハ検査ノ季節ニ先テ府縣廳ヨリ之ヲ徵兵署ニ送ル可シ

第四十條 壯丁中疾病處刑又ハ逃亡失踪等ニテ検査所ニ出頭セサル者アルトキハ戸主或ハ親族ノ者ヨリ逃亡失踪等ノ者ハ其事由書ニ戸長ノ奥書證印憲兵部若クハ警察署ノ證認ヲ受ケ疾病ノ者ハ醫師ノ診斷書第五書式處刑中ノ者ハ刑名宣告書寫ヲ以テ郡區長ヲ經テ徵兵検査所ニ届出可シ但起居自在ナラサル疾患ニシテ車駕等ヲ用フルモ出頭スル能ハサル者ハ其家ニ就キ之ヲ検査シ若クハ他ノ検査所ニ出頭セシムル等府縣駐在官府縣兵事課長商議シテ之ヲ處分ス可シ

第四十一條 徵兵検査所ニ於テ領收スル所ノ諸願届書ハ

府縣駐在官府縣兵事課長ト商議シ之ヲ處分シ壯丁名簿壯丁異動名簿ニ訂正ヲ加ヘ若シ處分スルコト能ハサルモノ或ハ成規外ニ係ルモノハ意見書ヲ添ヘ之ヲ巡行ノ後備軍司令官ニ差出ス可シ

第七章 検査

第四十二條 検査ハ概テ十一月十日ヨリ始メ第三十四條

ニ掲クル所ノ諸員徵兵検査所ヲ巡行シ其事務ヲ調理ス

第四十三條 戸長ヨリ検査ノ達ヲ受ケタル者ハ戸長ニ從

ヒ指定ノ日時ニ其場所ニ出頭シ府縣駐在官府縣兵事課

長ノ面前ニ於テ身體ノ検査ヲ受ク可シ

第四十四條 身體検査ヲ爲ストキハ郡區駐在官郡區長列

席シ郡區駐在官ハ壯丁名簿壯丁異動名簿中徵集ノ部ニ

記載シタル順序ニ壯丁ヲ呼出シ醫官ハ徵兵検査規則ニ

據リ體格ヲ検査シ合格ノ者ハ更ニ其體格ノ等位ヲ區別

ス不合格ノ者及ヒ身幹四尺九寸未滿ノ者ハ地方醫員ヲシテ之ヲ検査表ニ記註セシメ醫官之ニ捺印シテ府縣駐在官ニ差出ス可シ但四尺九寸未滿ノ者及ヒ不合格者ノ骨相ハ検査表ニ記註スルヲ要セス唯其尺度并ニ骨相ノ部ニ主任ノ醫員捺印ス可シ

第四十五條 壯丁ノ身體検査終ル毎ニ府縣駐在官ハ府縣兵事課長ト共ニ人別表ニ據リ本人ニ姓名住所族職業父兄ノ姓名等相違ナキヤ否ヲ尋問ス可シ

第四十六條 人別表調査ノ後府縣駐在官ハ検査表ニ據リ筆生ヲシテ人別表中身幹尺度ノ區畫ニ各自ノ寸尺ヲ記註セシメ又疾病缺損又ハ身幹四尺九寸未滿ノ者ノ備考區畫ニハ何ノ事故ニ付徵集猶豫、疾病、缺損ニ付除役等其要領ヲ記註セシム可シ

第四十七條 壯丁中癩癩、狂病、白痴、夜盲、聾、啞、遺尿、

等ノ如キ疾病アリ其狀ヲ申告セントスル者ハ平素其病狀ヲ熟知スル近隣ノ戸主二人以上ノ證書ヲ添テ検査所ニ申出可シ醫官ニ於テ相違ナシト認定スルトキハ之ニ奥書證印ス可シ若シ認定スルコト能ハサルトキハ府縣駐在官ニ致ス可シ駐在官ハ之ヲ徵集ノ部ニ加フ可シ

第四十八條 壯丁ノ身體検査終ル毎ニ府縣駐在官ハ府縣兵事課長ト共ニ合格又ハ不合格或ハ徵集猶豫ノ要領ヲ壯丁名簿壯丁異動名簿中ノ各自姓名ノ頭ニ記註ス可シ
第四十九條 身體検査終リタル後郡區長ハ合格者ヲシテ抽籤總代人ヲ撰ハシメ其姓名住所ヲ府縣兵事課長ニ通牒ス可シ

第五十條 府縣駐在官ハ人別表備考區畫ヲ案シ訂正ヲ加フ可キモノハ之ヲ加ヘ醫官ニ謀リ身體最モ健全ニシテ近衛兵ニ適當スト思考スルモノハ人別表備考區畫ニ近

衛何兵適當ノ文字ヲ記註ス可シ

第五十一條 府縣駐在官ハ壯丁ノ職業ニ注意シ海軍兵ニ適當スト思考スルモノハ人別表備考區畫ニ海軍何兵適當ノ文字ヲ記註ス可シ

第五十二條 府縣駐在官ハ合格者ノ人別表及ヒ檢査表ニ照シ各自ノ身材藝能職業ニ應シ豫メ兵種ヲ區別ス可シ

第五十三條 近衛諸兵ハ總テ品行方正ニシテ且體格最健全ナル者ヨリ之ヲ撰フ可シ其身幹砲兵ハ五尺五寸以上歩兵騎兵工兵ハ五尺三寸以上ノ者タル可シ

第五十四條 鎮臺ニ屬スル諸兵ノ身幹砲兵ハ五尺五寸以上歩兵騎兵工兵輜重兵ハ五尺三寸以上ノ者タル可シ若シ不足スルトキハ砲兵ハ五尺四寸以上歩兵騎兵工兵輜重兵ハ五尺二寸以上ノ者ヲ以テ之ニ充テ仍ホ不足スルトキハ臨時其定尺ヲ減スルコトアル可シ

第五十五條 陸軍雜卒又ハ職工トシテ徵集スル者ハ身幹五尺以上ニシテ雜卒又ハ職工ノ勤務ニ適當ノ者ヨリ之ヲ撰フ可シト雖モ若シ所要ノ人員不足スルトキハ其體格五種兵ニ亞ク者又ハ身幹四尺九寸以上ニシテ各其勤務ニ堪フ可キ者ヨリ之ヲ撰フ可シ

第五十六條 海軍兵ハ左ニ掲クル項目ノ順序ニ從ヒ之ヲ撰フ可シ其身幹水兵火夫ハ五尺以上ヲ定尺トス

第一項 航海學又ハ機關學卒業ノ者

第二項 西洋形船舶ニ乗組ノ者

第三項 汽車或ハ諸製造所等ニ於テ機關手又ハ火夫

ノ業ニ從事スル者

第四項 現ニ前諸項ノ職業ニ從事セスト雖モ一箇年以上營テ之ニ從事セシ者

第五項 日本形五百石以上ノ船舶ニ乗組ノ者

第六項 日本形五百石未満ノ船舶ニ乗組ノ者

第五十七條 海軍職工トシテ徵集スル者ハ身幹四尺九寸

以上ニシテ其勤務ニ適當ノ者ヨリ之ヲ撰フ可シ

第五十八條 兵種ノ區別己ニ竣レハ府縣駐在官ハ府縣兵

事課長ト共ニ壯丁名簿壯丁異動名簿人別表檢査表其他

一切ノ書類ヲ取纏メ巡行ノ後備軍司令官ニ差出ス可シ

第八章 抽籤準備

第五十九條 營所後備軍司令官ハ府縣駐在官ノ報告ニ據

リ一府縣ノ徵兵檢査事務完了ノ日時ヲ量リ巡回日割表

第十三 ヲ作り鎮臺後備軍司令官ヲ經テ之ヲ鎮臺司令官

ニ開申シ又其巡行ス可キ府縣廳及ヒ府縣駐在官ニ通牒

ス可シ

第六十條 府縣廳ニ於テハ後備軍司令官ノ通牒ニ據リ其

日時場所ヲ抽籤總代人ニ達シ出頭セシム可シ

第六十一條 抽籤施行ニ先チ府縣兵事課長ハ徵兵署ニ於

テ筆生ヲシテ籤丁名簿及ヒ籤札ヲ調製セシメ抽籤ノ席

ニ備ヘ置キ又其府縣籤丁ノ總員及ヒ各兵種現役補充ノ

徵員ヲ記載セシメ之ヲ抽籤場所ニ揭示ス可シ

第六十二條 籤丁名簿ハ籤丁ノ姓名住所ヲ記シ又籤札ハ

左式ノ如ク厚紙ヲ凡ソ方三寸ニ切り之ヲ四ツ折ニシテ

中分ヲ拵リ合格者ノ數ニ應シ調製ス可シ

近衛(鎮臺)

籤札(海軍)

何兵第何番

第六十三條 後備軍司令官ハ府縣巡行期日ニ至レハ徵兵

署ヲ巡行シ壯丁名簿壯丁異動名簿其他諸書類ノ成規ニ

適スルヤ否ヲ審査ノ上檢印シ又徵集猶豫ニ關スル書類

ハ府知事縣令ト商議シ成規ニ照シテ之ヲ處分ス可シ

第六十四條 後備軍司令官ハ抽籤施行ニ先チ徵兵令第四十一條ニ當ル先入兵同令第四十條ニ當ル入營延期ノ者及ヒ同令第十條ニ當ル志願兵ヲ調査シ現役兵編入ノ順序ニ從ヒ現役番號ヲ附ス可シ

第九章 抽籤

第六十五條 抽籤ハ後備軍司令官府知事縣令府縣駐在官府縣兵事課長郡區長及ヒ郡區駐在官列席シ徵集人員配當表ニ基キ近衛諸兵鎮臺諸兵及ヒ海軍諸兵ヲ區別シ雜卒職工亦其種類ヲ分チ之ヲ行フ可シ

第六十六條 抽籤總代人ノ抽キタル籤ヲ確証スル爲メ籤簿掛ハ其籤ヲ總代人ヨリ領收シ籤丁名簿姓名ノ頭ニ貼付シ徵兵署ノ割印ヲ押シ然後總代人ニ返付ス可シ

第六十七條 抽籤施行ノ際後備軍司令官ハ書記ヲシテ人別表ニ番號ヲ記入シ又籤簿第十四書式ヲ調製セシム可シ

籤簿ハ兵種ヲ分チ當籤番號ノ順序ヲ以テ登記シ卷末ニ籤簿掛署名押印ス可シ但籤簿ハ別ニ一部ヲ作り府縣廳ニ備ヘ置ク可シ

第六十八條 抽籤施行ノ後徵兵署ニ於テハ人別表ニ據リ番號割符第十五書式ヲ作り籤簿ニ引合セ徵兵署ノ割印ヲ押シ籤札ニ照シ抽籤總代人ニ交付ス可シ但抽籤總代人ハ受領證書第十六書式ヲ差出ス可シ

第十章 簿冊表面調製

第六十九條 抽籤竣ルノ後徵兵署ニ於テ左ノ名簿ヲ作ル可シ

- 一 除役名簿
徵兵令第七條及ヒ第十六條ニ當ル者ノ部類ヲ分チ第十七書式ニ據リ登記ス
- 二 徵集猶豫名簿
徵兵令第十七條第十八條第十九條及ヒ第二一條ニ當ル者ノ部類并ニ條目ヲ分チ第十八

書式ニ據リ登記ス但同令第十八條第五項及
ヒ第六項ニ當ル者ハ年度ヲ分チ別冊ニ登記
ス

三 先入兵不參名簿

徵兵令第四十一條ニ當ル者ニシテ其年檢査
ヲ受ケサル者ヲ第十九書式ニ據リ登記ス

四 入營延期不參名簿

徵兵令第四十條ニ當ル者ニシテ其年檢査ヲ
受ケサル者ヲ第二十書式ニ據リ登記ス

五 一年志願兵名簿

六 近衛現役兵名簿

七 鎮臺現役兵名簿

八 海軍現役兵名簿

九 近衛補充員名簿

十 鎮臺補充員名簿

十一 海軍補充員名簿

十二 現役兵檢査名簿

十三 補充員檢査名簿

右九名簿ハ番號ノ順序ニ從ヒ兵種及ハ部類
ヲ分チ人別表及ヒ檢査表ヲ以テ編製ス

第七十條 前條ニ掲グル名簿ハ各二部ハ一部
檢査名簿ヲ作り卷

末ニ後備軍司令官府知事縣令署名押印シ一部ハ府縣廳
ノ原簿トシ一部ハ府縣徵兵表ト共ニ後備軍司令官之ヲ
領収ス可シ

第七十一條 抽籤竣ルノ後徵兵署ニ於テハ府縣徵兵表二

十一書式ヲ作り又師管内徵兵事務全ク竣レハ後備軍司令部

ニ於テ府縣徵兵表ヲ以テ師管徵兵表ヲ編製シ第六十九

條ニ掲グル所ノ諸名簿并ニ一師管ノ徵兵景況書及ヒ書

類目錄ヲ添ヘ營所後備軍司令官ハ鎮臺後備軍司令官ヲ

經テ鎮臺司令官ニ差出ス可シ

第七十二條 鎮臺司令官ハ前條ノ名簿諸書類領収ノ後師

管徵兵表ヲ以テ軍管徵兵表ヲ編製シ徵兵景況書ヲ添ヘ

五月十日迄ニ之ヲ陸軍省ニ送致シ近衛兵名簿海軍兵名簿ハ四月一日迄ニ直ニ近衛局或ハ海軍省ニ送致ス可シ

第七十三條 國民兵名簿ハ壯丁名簿調査ノ原簿タルヲ以テ之ヲ府縣廳ニ備ヘ置キ二十歳以下ノ者ノ年齢二十歳ニ至ル迄ハ身上ノ異動アル毎ニ訂正ヲ加フ可シ

府縣廳ハ國民兵名簿ニ從ヒ毎年十二月一日調ヲ以テ國民兵人員表第二十書式ヲ製シ翌年一月三十一日迄ニ之ヲ陸軍省及ヒ鎮臺ニ差出ス可シ

第十一章 現役兵編入順序

第七十四條 現役兵ニ編入ノ順序左ノ如シ

- 一 徵兵令第四十一條ニ當ル者
年齢ノ順序又同年齡ノ者ハ誕生日ノ順序ニ從フ
- 二 徵兵令第四十條ニ當ル者
第一項ノ者ニ亞キ年齢ノ順序又同年齡ノ者ハ誕生日ノ順序ニ從フ

三 徵兵令第十條ニ當ル者

第二項ノ者ニ亞キ年齢ノ順序又同年齡ノ者ハ誕生日ノ順序ニ從フ

四 現役當籤ノ者

第三項ノ者ニ亞キ當籤番號ノ順序ニ從フ

五 補充當籤ノ者

歩兵ニ在テハ師管徵兵區内其他ハ軍管徵兵區内ニ平均シ當籤番號ノ順序ニ從フ

第七十五條 歩兵ノ補充員不足シ師管徵兵區内ニ於テ現役兵ヲ充實スル能ハサルトキハ營所後備軍司令官ハ鎮臺後備軍司令官ヲ經テ鎮臺司令官ニ上申シ鎮臺司令官ハ他ノ師管ヨリ之ヲ充實シ又他兵ノ補充員不足シ軍管内ニ於テ現役兵ヲ充實スル能ハサルトキハ鎮臺司令官ヨリ之ヲ陸軍省ニ開申ス可シ

第十二章 新兵入營前ノ扱

第七十六條 現役餼ニ當リタル者ハ入營ノ命ヲ待ツモノナルカ故五日間ニ往復スル能ハサル地ニ出ルヲ許サス

第七十七條 新兵ハ概テ毎年四月二十日ヨリ五月二十日迄ニ入營セシム可シ

第七十八條 新兵入營ノ日時及ヒ場所ハ毎年近衛局鎮臺又ハ鎮守府ヨリ府縣廳ニ通牒シ府縣廳ハ速ニ其旨ヲ入營ス可キ者ニ達セシメ左ノ手續ヲ爲ス可シ

一 鎮臺兵ハ其員數及ヒ入營地ニ應シ最寄キ分ヲ所要ノ附添人ヲ附シ入營地ノ後備軍司令部ニ出頭セシム可シ

二 近衛兵及ヒ海軍兵ハ一府縣ニ一人若クハ二人ノ附添人ヲ附シ近衛局或ハ鎮守府ニ出頭セシム可シ

第七十九條 新兵入營地迄ノ旅費并ニ附添人ノ旅費ハ定

則ニ照準シ大藏省ヨリ支給ス可シ

第八十條 新兵入營ノ期ニ臨ミ父母ノ重病或ハ死没等ノ故ヲ以テ入營延期ヲ願フ者ハ戸主又ハ親族ノ者ヨリ事實ヲ詳記シ第五書式其重病ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ戸長郡區長與書證印シ郡區駐在官ヲ經テ府縣駐在官ニ願出ル

ニ於テハ詮議ノ上十四日以内ノ延期ヲ許スヘシ

第八十一條 前條ノ延期ヲ許可セシトキハ府縣駐在官ハ其旨ヲ近衛局鎮守府又ハ入營地ノ後備軍司令部ニ通牒スヘシ

第八十二條 入營延期ノ許可ヲ得タル者期滿ツレハ即日戸長ニ届出戸長ハ直ニ出發セシメ其旨ヲ近衛局鎮守府又ハ入營地ノ後備軍司令部ニ届出可シ

第八十三條 新兵入營ノ期ニ臨ミ其身疾病犯罪等ニテ入營シ難キ旨戸長ニ届出ルトキハ戸長與書證印シ郡區長

ヲ經テ近衛局鎮守府又ハ入營地ノ後備軍司令部ニ届出可シ其事故止ムトキ亦同シ尤モ疾病延ヒテ十五日以上ニ及フ者ハ最初届出ノ日ヨリ三十日毎ニ届出其年九月一日ニ至ルモ事故尙止マサル者ハ本人所持ノ番號割符ヲ添ヘ同月十五日限リ郡區長ヲ經テ府縣廳ニ差出シ府縣廳ヨリ之ヲ徵兵器ニ送ル可シ

第八十四條 新兵入營前甲府縣ヨリ乙府縣ニ轉籍又ハ全戸寄留スル者ハ即日戸主ヨリ甲府縣戸長ニ届出戸長ハ郡區長ヲ經テ府縣廳ニ届出可シ又乙府縣ニ到着スルトキハ前同様ノ手續ヲ以テ番號割符ヲ添ヘ届出可シ然ルトキハ甲府縣ノ當籤番號ヲ存シ他日入營ノ時ニ至リ乙府縣同番號ノ者ニ次テ入營セシム可シ但本人ヨリ轉籍又ハ全戸寄留ノ旨ヲ甲乙府縣ノ郡區駐在官ニ届出可シ

第十三章 歸休歸省

第八十五條 徵兵令第十七條ニ照シテ徵集ヲ猶豫スルハ抽籤以前該條項ニ當ル者ニ限ル但戸主若クハ父兄等死没シ又ハ重罪ノ刑ニ處セラレ或ハ癡疾不具等トナリ本人ヲ要スルニアラサレハ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルトキハ詮議ノ上郷里ニ歸休セシメ又ハ第一豫備徵員ニ編入ス

抽籤後養子又ハ他家ノ相續人トナリ前項ノ事故ヲ生スルモ詮議ニ及スハ

第八十六條 前條但書ニ當ル者ハ戸主又ハ親族ノ者ヨリ其事由ヲ詳記シ戸籍寫若クハ刑名宣告書寫若クハ醫師診斷書第五書式并ニ同郡區内現役兵ノ戸主タル者二人以上ニシテ事實ヲ證セシメ戸長郡區長與書證印ノ上郡區駐在官ヲ經テ府縣駐在官ニ差出シ該官ハ後備軍司令官ヲ經テ近衛局鎮守府或ハ鎮守府ニ申牒シ近衛局鎮守府ハ陸軍

省ニ鎮守府ハ海軍省ニ開申ス可シ但癘疾不具等ノ者ハ陸海軍醫官ヲシテ地方醫師診斷書ノ當否ヲ判定セシメ又ハ府縣駐在官及ヒ其地陸海軍醫官ヲシテ其家ニ就キ檢査セシムルコトアル可シ

第八十七條 前條ノ者生兵或ハ二等若水兵若クハ二等若火夫ノ卒業後ナレハ郷里ニ歸休セシメ又卒業以前ナレハ之ヲ第一豫備徵員ニ編入ス

第八十八條 近衛兵ニシテ前條ニ據リ歸休セシメ又ハ第一豫備徵員ニ編入スル者ハ近衛局ヨリ本籍所管ノ鎮臺ニ通牒シ該鎮臺ノ管理ニ屬ス可シ

第八十九條 現役兵在營在艦中父母ノ重病或ハ死亡等ニテ歸省ヲ願フトキハ其戸主又ハ親族ノ者ヨリ事實ヲ詳記シ（其重病ハ醫師ノ診斷書第五書式ヲ添ヘ）戸長郡區長ノ與書證印ヲ以テ直ニ本人所屬ノ隊或ハ鎮守府ニ願出

ルニ於テハ詮議ノ上往復ヲ除キ十四日以内ノ歸省ヲ許ス可シ尤モ旅費ハ自辨タル可シ但生兵二等若水兵二等若火夫ノ卒業ニ至ラス或ハ臨時ニ演習觀兵ノ學アルトキ又ハ航海中ハ本條ノ限ニ在ラス

第十四章 補充員及ヒ豫備徵員

第九十條 補充員ハ臨時補缺ヲ除クノ外鎮臺ニ於テ毎年九月一日ノ現役兵缺員ニ應ジ概テ十月二十日ヨリ同月三十一日迄ニ入營スルモノトス但近衛兵海軍兵ニ在テハ近衛局海軍省ヨリ所要ノ人員ヲ九月二十日迄ニ陸軍省ニ通牒シ陸軍省ハ之ヲ各軍管ニ賦課ス可シ

第九十一條 補充員入營ノ期ニ臨ミ疾病又ハ犯罪等ニテ入營スル能ハサル者ハ其事實ヲ詳記シ本人所持ノ番號割符ヲ添（疾病ハ醫師ノ診斷書第五書式ヲ添ヘ）速ニ戸長ニ届出可シ戸長ハ與書證印シ郡區長ヲ經テ府縣廳ニ差

出ス可シ該廳ニ於テハ其次番號ノ者ヨリ順次ニ繰上ケ
徵集人員ヲ充實シ入營セシメ其旨ヲ府縣駐在官ニ通牒
ス可シ

第九十二條 前條ノ事故ニ據リ入營セサル者ハ翌年徵集
ノ期ニ當リ郡區長ニ於テ其名簿ヲ作り府縣廳ニ差出シ
府縣廳ヨリ之ヲ徵兵署ニ送ル可シ

第九十三條 補充員ニシテ入營ヲ命セラレタル者其入營
迄ノ扱ハ總テ現役當籤者入營前ノ扱ト異ナルコトナシ

第九十四條 補充員ハ十日間ニ往復スルコト能ハサル地
ニ出ルヲ許サス然レトモ已ムヲ得サル事故ヲ生シ其日
限ヲ越エル地ニ出テノコトヲ欲スル者ハ事實并ニ往先
ヲ詳記シ戶長郡區長ノ與書證印ヲ受ケ郡區駐在官ニ出
願ス可シ

第九十五條 補充員ニシテ現役ヲ志願スル者ハ本人ノ願

書ニ親族連署シ戶長郡區長ノ與書證印ヲ受ケ郡區駐在
官ニ願出ルトキハ詮議ノ上當籤番號ノ順序ニ拘ハラヌ
補充員徵集同時之ヲ入營セシム可シ

第九十六條 補充員身上ニ異動ヲ生スルトキハ戶主又ハ
親族ノ者ヨリ三日以内ニ戶長ニ届出戶長郡區長與書証
印シ郡區駐在官ヲ經テ之ヲ府縣駐在官ニ届出可シ

第九十七條 補充員ニシテ甲府縣ヨリ乙府縣ニ轉籍又ハ
全戶寄留スル者ハ第八十四條ノ例ニ據ル可シ

第九十八條 補充員ニシテ第八十五條但書ニ當ル事故ヲ
生シ徵集猶豫ヲ出願スル者ハ第八十六條ノ手續ニ據リ
主務省ニ開申ス可シ但主務省ニ於テハ詮議ノ上第一豫
備徵員ニ編入ス可シ

第九十九條 第一豫備徵員身上ニ異動ヲ生スルトキハ戶
主又ハ親族ノ者ヨリ三日以内ニ戶長ニ届出戶長ハ第九

十六條ノ例ニ據リ之ヲ處分スヘシ

第百條 第一豫備徵員ニシテ十五日間ニ往復スルコト能ハサル地ニ旅行セント欲スル者ハ其往先ヲ詳記シ戶長郡區長ヲ經テ郡區駐在官ニ届出テ然ル後旅行ス可シ但其届書ニハ旅行中徵集ノ命アルトキハ直ニ之ヲ通牒ス可キ者ノ姓名住所ヲ記入ス可シ

第百一條 徵兵令第三十二條ニ據リ第二豫備徵員トナル者ハ其年四月二十日ニ至レハ別ニ命ナクシテ第二豫備徵員ニ編入セラレタル者ト心得可シ

第二豫備徵員年齢三十三歳トナル年ノ四月二十日ニ至レハ別ニ命ナクシテ國民兵役ニ編入セラレタル者ト心得可シ

第百二條 補充員服役年期ノ計算ハ現役兵ト同シク四月二十日ヨリ起算シ第一豫備徵員服役年期ノ計算ハ其編

入ス可キ年ノ四月二十日ヨリ起算ス可シ但第八十七條ニ當リ第一豫備徵員トナル者ハ其入營年ノ四月二十日ヨリ起算ス

第十五章 一年志願兵

第百三條 徵兵令第十一條ニ據リ一個年間現役ニ服セシコトヲ志願スル者ハ毎年九月一日ヨリ同月十五日迄ニ其願書^{第二十}三書式^三ヲ戶長ニ差出スヘシ戶長ハ之ニ奥書證印シ郡區長ヲ經テ十月一日限り府縣廳ニ差出シ府縣廳ヨリ之ヨ徵兵署ニ送ル可シ

第百四條 志願者ハ當分ノ内各自ノ志望ニ由リ歩兵看護卒及ヒ看馬卒ノ内ニ就キ其種類ヲ撰ヒ出願スルコトヲ得

第百五條 食料被服等ノ自辨金ハ一名金壹百圓ニシテ其現品ハ官ヨリ之ヲ支給ス但自辨金ハ二月一日迄ニ府縣

廳ヲ經テ鎮臺ニ納ム可シ

徵兵令第十一條第二項ニ據リ若干月ニシテ歸休ヲ令シタル者ニハ殘金ヲ返付ス可シ

第百六條 志願兵入營前ノ扱ハ總現役當籤者ト異ナルコトナシ

入營後第八十五條但書ニ當ル事故ヲ生セシトキハ第八十六條及ヒ第八十七條ヲ適用ス可シ

第百七條 歩兵志願者ハ各軍管ニ之ヲ纏メ別段ノ教育ヲ受ケシメ看護卒看馬卒志願者ハ各軍管ノ其部ニ屬シ教育ヲ受ケシム可シ

第百八條 志願兵現役一個年ヲ終レハ六個年間後備役ニ服ス可シ

第百九條 志願兵中品行方正勤務勉勵ニシテ技藝ニ熟達シ下士ノ任ニ堪フ可キ者ニハ其適任證書ヲ付與ス可シ

又教育上拔群ノ結果ヲ得タル者ハ豫備役下士ニ任シ士官適任證書ヲ付與ス可シ

第百十條 志願兵檢査所往復及ヒ入營歸郷ノ旅費ハ總テ自辨トス

第十六章 臨時徵兵事務

第百十一條 戰時若シハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルトキハ左ニ掲クル項目ノ順序ニ從ヒ徵集ス可シ

一 徵兵令第四十條ノ事故止ミタル者

二 補充員

三 第一豫備徵員

四 徵兵令第十七條ニ當リ徵集ヲ猶豫セシ者

五 第二豫備徵員

第百十二條 豫備徵員ハ年次ヲ逐ヒ服役日尙淺キ者ヨリ當籤番號ノ順序ニ從ヒ之ヲ徵集シ又徵兵令第十七條ニ

當リ徵集ヲ猶豫セシ者ハ項目及ヒ當籤番號ノ順序ニ從
ヒ之ヲ徵集ス

第一百十三條 第十一條第一項第二項第三項ニ掲クル者
ヲ徵集スルノ手續ハ平常補充員ヲ徵集スルニ同シ

第一百十四條 第十一條第四項第五項ニ掲クル者ヲ徵集
スルトキハ府縣廳ニ於テ臨時徵兵署ヲ設ケ徵集ノ準備
ヲ爲ス可シ

第一百十五條 臨時徵兵署ニ於テハ檢査所并ニ巡回日割ヲ
定メ後備軍司令官及ヒ府知事縣令ニ開申ス可シ但府縣
廳ニ於テハ戶長ヲシテ壯丁ヲ引纏メ指定ノ日時場所ニ
出頭セシム可シ

第一百十六條 檢査所巡行ノ諸員ハ府縣駐在官醫官府縣兵
事課長地方醫員及ヒ筆生トス但郡區長郡區駐在官ハ檢
査所ニ出頭シ同所ノ事務ヲ補助ス可シ

第一百十七條 身體檢査竣ルノ後府縣駐在官ハ臨時徵兵署
ニ於テ府知事縣令ト商議シ徵兵令第十七條ニ當ル者ハ
各項目ニ番號ヲ分チ第二豫備徵員ハ各年度ニ番號ヲ分
チ抽籤ヲ施行ス可シ

第一百十八條 一府縣ノ臨時徵兵事務全ク竣ルノ後府縣駐
在官ハ人別表檢査表ヲ點檢シ兵種及ヒ部類ヲ分チ人別
表ハ臨時徵員明細名簿トシ檢査表ハ臨時徵員檢査名簿
トシ籤簿ト共ニ營所後備軍司令官ニ差出シ該官ハ之ヲ
一師管ニ取纏メ兵種ヲ分チ人員表ヲ製シ名簿ト共ニ鎮
臺後備軍司令官ヲ經テ鎮臺司令官ニ差出シ鎮臺司令官
ハ其軍管人員表ヲ製シ之ヲ陸軍省ニ開申ス可シ

第一百十九條 臨時徵兵事務ハ本章ニ掲グル諸條ヲ除クノ
外定期徵兵事務ニ準シ便宜處分ス可シ

第一百二十條 國民兵ヲ徵集スルノ方法ハ別ニ之ヲ定ム

第十七章 雜則

第二百一十一條 徵兵令第十條ニ據リ現役志願ノ者ハ其願書第二十四ニ戸長郡區長ノ與書証印ヲ受ケ徵兵検査所ニ出願ス可シ但検査所ニ往復ノ旅費ハ合格者ニ限り官給ス

第二百二十二條 徵兵令第十七條第十八條第一項乃至第三項及ヒ第十九條ニ當ル者年齢滿二十七歲以下ニシテ現役ヲ志願スルトキハ前條ノ手續ヲ以テ徵兵検査所ニ出願ス可シ但旅費ハ前條ニ同シ

第二百二十三條 徵兵令第十一條及ヒ第十八條第二項ノ卒業註書ハ學期二個年以上ノ學校ニ於テ二個年年以上ノ課程ヲ卒リタル証書ニ限ル

第二百二十四條 徵兵令第十七條ニ當ル者ヲ徵集スルトキハ其項目ノ順序ニ從フ可シ

第二百二十五條 徵兵令第十七條第一項及ヒ第二項ノ兄弟ハ同戸籍中ノ實兄弟ニ限ル

第二百二十六條 徵兵令第十七條第一項ノ兄弟同時徵集ニ當リ検査ノ上共ニ合格スルトキハ情願ニ據リ一人ヲ猶豫ス可シ

前項ノ者他府縣ニ寄留シ該地ニ於テ検査ヲ受ケント欲スルトキハ各自届出ヲ爲ス年ノ八月十五日迄ニ其旨ヲ寄留地戸長ニ願出本籍戸長ニ届出可シ

第二百二十七條 武官并ニ陸海軍生徒ノ兄弟ハ徵兵令第十七條第一項第二項ニ據ルノ限ニ在ラス

第二百二十八條 豫備兵後備兵召集中死没又ハ公務ノ爲メ負傷シ若クハ疾病ニ罹リ免役シタル者ノ兄弟徵集ニ當ルトキハ徵兵令第十七條第二項ニ依リ徵集猶豫ニ屬ス可シ

第二百二十九條 徵兵令第十七條第一項ノ現役兵ノ兄或ハ弟一人ハ徵集ヲ猶豫スベシト雖モ現役中ノ者其年四月現役滿期或ハ脱走中又ハ歸營償勤中ナルトキハ徵集ニ應ス可シ

第三百十條 徵兵令第十七條第十八條第十九條及ヒ第二十一條ニ當リタル者七個年間ニ其資格ヲ失ヒタルトキハ徵集スト雖モ更ニ徵兵令第十七條及ヒ第十八條第七項ニ當ル者并ニ陸海軍生徒トナル者ハ徵集猶豫ニ屬ス可シ

第三百十一條 各自届出後即チ九月十六日以後ニ於テ徵兵令第十八條第一項第二項第三項第四項^{陸海軍生徒ヲ際ク}第九條及ヒ第二十一條ニ當ルモ徵集猶豫ノ限ニ在ラスト雖モ翌年四月十一日以後九月十五日迄ニ該條項ノ名稱ヲ得タル者ハ徵集猶豫ニ屬ス可シ

第三百十二條 徵兵令第十八條第三項ノ生徒ニシテ二個年以上ノ課程ヲ卒リタル者ハ同令第三十一條ニ依リ第一豫備徵員ニ編入ス可キヲ以テ徵兵検査時限ニ至レハ郡區長ヨリ其學校ニ通牒シ最寄ノ徵兵検査所ニ出頭セシメ身體ノ検査ヲ受ケシム可シ

第三百十三條 徵兵令第十八條第三項ニ掲ケタル官立大學校ニ準スル官立學校ハ左ノ如シ

- 一 工部大學校
- 二 農商務省駒場札幌農學校
- 三 司法省法學校

第三百十四條 徵兵令第十八條第一項第二項第三項第四項第十九條第廿條^{第五項}及ヒ第二十一條ニ當ル者其事^{ヲ除ク}故止ミタルトキハ學校長若クハ所屬長ヨリ本人所管ノ府縣廳ニ通牒ス可シ

第三百三十五條 徵兵令第十九條ニ掲クル修業一個年以上ノ課程ヲ卒リタル生徒トハ該校ニ於テ其課程ヲ卒リタル者ノミニ限ラス他ノ學校ヨリ入學シ一個年以上ノ課程ヲ卒リタル生徒ニ編入セラレタル者亦該條ニ依リ徵集猶豫ニ屬ス可シ

第三百三十六條 官吏判任以上及ヒ戸長ハ徵兵令第二十條第一項ニ依リ召集ヲ猶豫スト雖モ準官吏ハ該條項ニ依リ召集ヲ猶豫スルノ限ニ在ラス

第三百三十七條 附籍戸主及ヒ其嗣子或ハ承祖ノ孫ハ徵兵令第二十二條第一項ニ依リ徵集スト雖モ其戸主徵兵各自届出期限即チ九月十五日以前ニ一戸ヲ設立スルトキハ徵兵令第十七條第三項及ヒ第五項ニ依リ徵集猶豫ニ屬ス可シ但分家シ又ハ絶家若クハ廢家ヲ再興シタル戸主ニシテ更ニ附籍シタル後別ニ一戸ヲ設立スルモ本條

ノ限ニ在ラス

第三百三十八條 徵兵令第二十二條第四項ノ嗣子或ハ承祖ノ孫ハ徵集スト雖モ其戸主分家又ハ絶家廢家再興後癡疾不具等トナリ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルトキ又ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ徵集猶豫ニ屬ス可シ

第三百三十九條 徵兵令第二十二條第二項ノ嗣子或ハ承祖ノ孫ハ徵集スト雖モ各自届出ヲ爲ス年ノ九月十五日迄ニ前嗣子承祖ノ孫若クハ相續人同戸籍中ノ者癡疾又ハ不具等トナリ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサル者ニ齊シキトキ又ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ徵集猶豫ニ屬ス可シ

第四百十條 徵兵令第二十二條第二項ニ當ル嗣子或ハ承祖ノ孫ニシテ其第六項ニ依リ戸主トナリタル者及ヒ其第七項ノ戸主ハ徵集スト雖モ其徵集ニ應ス可キ年ノ一

月迄ニ前戸主同戸籍中ノ者已ニ六十歳ニ至ルカ又各自届出チ爲ス年ノ九月十五日迄ニ癘疾又ハ不具等トナリ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサル者ニ齊シキトキ又ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ徵集猶豫ニ屬ス可シ

第四百一十一條 徵兵令第十七條第三項第二十二條第三項及ヒ第七項ニ掲グル六十歳又同令第二十二條第五項及ヒ第九項ニ掲グル五個年ハ徵集ニ應ス可キ年ノ一月ヲ以テ分界ト爲ス可シ

第四百一十二條 徵兵令第十八條第五項第六項ニ當ル者ハ事故ノ存スル間徵集猶豫ニ屬スト雖モ毎年検査所ニ出頭シ身體ノ検査ヲ受ク可シ

第四百一十三條 徵兵検査呼出又ハ入營ニ際スルトキハ民事詞訟ノ爲メ裁判所ノ召喚アリト雖モ検査又ハ入營日時ヲ延期セス

第四百一十四條 戰時若シハ事變ニ際シテハ第八十條第八十五條但書及ヒ第八十九條ニ當ル事故生スト雖モ詮議ニ及ハス

第四百一十五條 徵兵令第十七條第四項及ヒ同令第二十二條ノ諸項ニ當ル癘疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサル者ハ徵兵検査所ニ呼出シ検査ス可シ但起居自在ナラサル疾患ニシテ車駕等ヲ用フルモ出頭スル能ハサル者ハ府縣駐在官醫官及ヒ府縣兵事課長其家ニ就キ検査スルコトアル可シ

第四百一十六條 前條ノ者他府縣ニ寄留シ該地ニ於テ検査ヲ受ケント欲スルトキハ適齡者ノ各自届出チ爲ス年ノ八月十五日迄ニ其旨ヲ寄留地戸長ニ願出本籍戸長ニ届出可シ

第四百一十七條 徵兵署閉鎖後徵兵令第三十六條ニ當ル者

ハ翌年之ヲ徴集ス可シ

第四百四十八條 徴兵令第四十一條ニ當ル者其年疾病或ハ犯罪等ニテ期限ニ際シ入營スルコト能ハスシテ九月一日ニ至ルモ事故尙止マサルトキハ翌年更ニ檢査ヲ遂ケ仍ホ先入兵トシテ徴集ス可シ

第四百四十九條 徴兵令第四十一條ニ當ル者ニシテ爾後同令第十七條第十八條第四項第五項第六項及ヒ第十九條第八項條九項ヲ除クニ該當スト雖モ徴集猶豫ノ限ニ在ラス

第五百十條 徴兵既行ノ地在籍ノ者ニシテ沖繩縣及ヒ北海道ノ内徴兵未行ノ地ニ轉籍シ更ニ他ノ府縣ニ寄留スル者ハ寄留地ニ於テ各自屈出ヲ爲シ其本籍ノ者ト同シク徴集ニ應ス可シ

徴兵未行ノ地ニ單身寄留ノ者ハ本籍地ニ歸リ徴集ニ應ス可シト雖モ全戸寄留ノ者ハ徴集猶豫ニ屬ス可シ

第五百一十一條 徴兵令第三十四條第三十五條第三十六條

第三十九條ノ屈出ヲ怠リ又ハ兵役ヲ免レシカ爲メ身體ヲ毀傷シ疾病ヲ作爲シ其他詐偽ノ所爲ヲ用ヒ又ハ逃亡潜匿シタル者又ハ正當ノ故ナク檢査所ニ參會セサル者アルトキハ普通治罪法ノ手續ニ依リ之ヲ告發ス可シ

第五百一十二條 徴兵署又ハ徴兵檢査所ニ差出ス可キ願書ハ三通届書ハ二通徴兵署宛ニテ差出ス可シ

第十八章 附則

第五百一十三條 明治十四年一月ヨリ明治十六年十二月迄

ニ滿二十歳トナリタル者ニシテ舊徴兵令第二十八條ニ當リ國民軍ノ外免役ニ屬スル者新徴兵令ニ照シ常備年期ノ第七年檢査時限内ニ在テ名稱ヲ罷メタルトキハ更ニ徴集ニ應セシメ其第七年檢査時限ヲ經過スル者ハ徴兵令ニテ處分セシ儘之ヲ名簿ニ据ヘ置ク可シ

第五百十四條 明治十四年一月ヨリ明治十六年十二月迄ニ滿二十歳トナリタル者ニシテ舊徵兵令第二十條第三十條第三十一條及ヒ第三十四條ニ當リ平時免役又ハ徵集猶豫ニ屬スル者新徵兵令ニ照シ常備年期ノ第七年検査期限内ニ在テ名稱ヲ罷メタルトキハ更ニ徵集ニ應ゼシメ其第七年検査時限ヲ經過スル者ハ新徵兵令第三十二條ニ依リ第二豫備徵員ト爲ス可シ

第五百十五條 現今豫備兵服役中ノ者ハ最初豫備軍ニ編入セシ年ノ四月二十日ヨリ起算シ四個年ノ役ニ服セシメ滿期ノ後後備兵役ニ服セシム但定期ニ在ラヌシテ臨時豫備軍ニ編入セシ者ハ其編入セシ日ヨリ起算シ四個年ノ役ニ服セシメ滿期ノ後後備兵役ニ服セシム

第五百十六條 現今後備兵服役中ノ者ハ最初後備軍ニ編入セシ年ノ四月二十日ヨリ起算シ五個年ノ役ニ服セシ

メ滿期ノ後國民兵役ニ服セシム但定期ニ在ラヌシテ臨時後備軍ニ編入セシ者ハ其編入セシ日ヨリ起算シ五個年ノ役ニ服セシメ滿期ノ後國民兵役ニ服セシム

第五百十七條 舊徵兵令第三十六條ニ據リ第一豫備徵兵服役中ニシテ年齢二十七歳ヲ經過セシ者及ヒ現ニ第二豫備徵兵服役中ノ者ハ新徵兵令第三十二條ニ依リ第二豫備徵員ト爲ス可シ

第五百十八條 新徵兵令第二十二條ノ諸項ニ當ル者ト雖モ其事柄ノ明治六年一月十日即チ徵兵令創定以前ニ係ル者ハ該條項ヲ以テ處分スルノ限ニ在ラス

第五百十九條 明治十六年十二月迄ニ年齢滿二十歳トナリタル者ニシテ舊徵兵令第六十條第六十一條及ヒ舊徵兵事務條例第八十條ノ届出ヲ怠タル者明治十七年九月十五日迄ニ届出サルトキハ新徵兵令第四十三條ニ依

リ處分ス可シ

(書式略ス)

○ 徵發令

○第四十三号明治十五年八月十二日布告

徵發令別冊ノ通制定ス

右奉 勅旨布告候事

徵發令

第一條 徵發令ハ戰時若クハ事變ニ際シ陸軍或ハ海軍ノ全部又ハ一部ヲ動カスニ方リ其所要ノ軍需ヲ地方ノ人民ニ賦課シテ徵發スルノ法トス

但平時ト雖モ演習及ヒ行軍ノ際ハ本條ニ准ス

第二條 徵發ハ陸軍若クハ海軍官憲ノ徵發書ヲ以テ之ヲ行フ

第三條 左ニ記列スル官憲ハ徵發書ヲ出スノ權ヲ有ス

- 一 陸軍卿海軍卿鎮臺司令官及ヒ鎮守府長官
- 二 陸軍ニ於テハ特命司令官軍團長師團長旅團長分遣

隊長若クハ演習及ヒ行軍ノ軍隊長

三 海軍ニ於テハ特命司令官艦隊司令長官艦隊司令官
分遣艦長若クハ操練及ヒ航海ノ艦隊司令官又ハ隊
長

第四條 徵發ス可キモノ、種類ニ依リ徵發區會社モ之ヲ
ニ准ス定ムルコト左ノ如シ

- 一 第十二條第一項ハ 府縣
- 二 第十二條第二項及ヒ第三項ハ 郡區
- 三 第十二條第四項以下各項及ヒ第十三條各項ハ町村
- 四 船舶會社所有ノ船舶及ヒ鐵道會社所有ノ汽車ハ會社

第五條 徵發ス可キモノハ徵發區内ニ現在スルモノニ限
ル

第六條 徵發書ハ徵發區ニ從ヒ府知事縣令郡區長戶長若

クハ停車場長船舶會社ノ店長ニ付ス可シ

第七條 徵發書ヲ受ケタル府知事縣令郡區長戶長若クハ
停車場長船舶會社ノ店長ハ時期ヲ誤ルコトナシ其供給
ヲ完全セシムルノ責アルモノトス

第八條 各徵發區ニ於テハ臨時徵發ニ應ス可キ便宜ノ方
法ヲ豫定ス可キモノトス

第九條 徵發ヲ課セラレタルモノハ時期ニ違フコトナシ
之ヲ供給スルノ義務アルモノトス若シ其時期ニ違フト
キハ府知事縣令郡區長戶長他ノ方法ヲ以テ調達シ爲メ
ニ生シタル費用ハ本人チシテ之ヲ辨償セシム但會社ニ
係ルモノハ陸海軍官憲直ニ其處分ヲ爲ス可シ

第十條 徵發ヲ課セラレタルモノ商用其他ノ事故ヲ以テ
供給ヲ拒ミ又ハ供給ス可キモノヲ藏匿シタルトキハ直
ニ之ヲ使用スルコトヲ得

第十一條 供給ヲ受ケタル陸海軍官憲ハ其受領証票ヲ府知事縣令郡區長戸長若クハ停車場長船舶會社ノ店長ニ交付スヘシ

第十二條 徵發ス可キモノ左ノ如シ

- 一 米麥秣鹽味噌醬油漬物梅干及ヒ薪炭
- 二 乘馬馱馬駕馬車輛其他運搬ニ供スル獸類及ヒ器具
- 三 人夫
- 四 宿舍庭園及ヒ倉庫
- 五 飲水石炭
- 六 船舶
- 七 鐵道瀛車
- 八 演習ニ要スル地所
- 九 演習ニ要スル材料器具

第十三條 戰時若クハ事變ニ際シテ第十二條ノ諸項ニ掲

クルモノ、外徵發ス可キモノ左ノ如シ但平時ノ演習及ヒ行軍ニハ徵發スルコトヲ得ス

- 一 造船所工作所及ヒ軍事ノ工作ニ要スル材料器具
- 二 職工礦夫洗濯人ノ類
- 三 被服裝具艸鞋兵器彈藥船具寢具藥劑治療器械及ヒ
 紮帶具
- 四 水車搗春ノ類
- 五 病院

第十四條 第十二條第二項中徵發ノ免除ヲ受ク可キモノ左ノ如シ

- 一 皇族所用ノ車馬
- 二 外國公使館并ニ領事館ニ屬スル車馬
- 三 乘馬本分タル職務ニ要スル馬匹
- 四 郵便用ノ車馬

五 公認セラレタル種牛種馬

第十五條 第十二條第四項中徵發ノ免除ヲ受ク可キモノ

左ノ如シ

一 公務ニ屬スル麻署

二 皇族ノ邸宅

三 外國公使館領事館及ヒ其所屬館

四 鐵道電信郵便用ノ建造物

五 陸海軍將校并ニ同等官現住ノ家屋

六 博物館書籍館

七 病院盲啞院棄兒院

八 學校但臨戰合圍地境內ニ在リテハ此限ニ在ラス

九 製造場内機械室

第十六條 第十二條第二項ニ掲グルモノ、使用ハ其原用
ヲ轉シテ他用ニ供スルヲ許サス但戰時若クハ事變ニ際

シテハ此限ニ在ラス

第十七條 第十二條第二項ニ掲グルモノハ其差出場所ヨ

リ六里未滿ノ地ニ於テ使用スルヲ例トシ一日ノ使用ハ

六里ニ越ユルコトヲ得ス但戰時若クハ事變ニ際シテハ

六里以外ノ地ニ使用スルコトヲ得

第十八條 第十二條第四項ニ掲グルモノハ合圍地境內ヲ

除クノ外居住者ノ起臥及ヒ營業ニ必用ナル場所ヲ徵用

スルコトヲ得ス但營業ニ必要ナルモ旅店等ハ此限ニ在

ラス

第十九條 宿舍ノ廣狹ハ其地家屋ノ數ト隊伍ノ編制トニ

從ヒ一定シ難シ故ニ臨時適宜ニ之ヲ定ム

第二十條 第十二條第四項ニ掲グルモノハ陸軍若クハ海

軍ノ都合ニ依リ特ニ其場所ヲ指定スルコトアル可シ

第二十一條 宿舍ヲ定メタルノ後ハ區町村ノ便宜ヲ以テ

他ニ轉移セシムルコトヲ許サス廐園倉庫亦同シ

第二十二條 宿舍廐園ノ徵發ヲ課セラレタルモノハ併セテ人馬ノ食飼ヲ供給ス可シ但駐軍三日以上ニ至ルトキハ第四日ヨリ食飼ハ陸軍若クハ海軍ノ自辨トス

第二十三條 第十二條第六項ノ徵發ニ係リ其乘載人馬ノ食飼ヲ要スルモノハ併セテ供給セシム

第二十四條 第十二條第六項及ヒ第七項ニ掲クルモノハ戰時若クハ事變ニ際シ借切トシテ之ヲ徵用スルコトアル可シ

第二十五條 第十二條第二項第六項及ヒ第七項ニ掲クルモノハ其操業者ヲ併セテ徵用スルヲ例トス但時宜ニ依ル各個分別シテ徵用スルコトヲ得

第二十六條 第十二條第六項ニ掲クルモノヲ操業者ト各個ニ分別シテ徵用スルハ戰時若クハ事變ニ際ニ限ル但

船橋及ヒ舢舨ニ充ツルモノハ此限ニ在ラズ

第二十七條 第十二條第七項ニ屬スル瀛車其屬具鐵道建築所用ノ材料器具及ヒ操業者ヲ各個ニ分別シテ徵用スルハ戰時若クハ事變ニ際ニ限ル

第二十八條 第十三條第五項ニ掲クルモノハ陸海軍病院ノ補助トシテ徵用スルヲ例トス但合圍地境內ニ在リテハ全ク明渡サシムルコトヲ得

第二十九條 徵發ニ係ルモノハ第三十一條乃至第五十條ニ定ムル所ノ方法ニ從ヒ賠償ス

第三十條 徵發物件ヲ差出場所ニ輸送スルハ徵發區ノ義務トシ其輸送賃ヲ支辨セス

第三十一條 賠償ハ平時ト戰時トヲ論セス其時々之ヲ支辨スルモノトス但戰時若クハ事變ニ際シ紛擾ノ爲メ延滞シテ三ヶ月ヲ越ユルトキハ年六分ノ割ヲ以テ其利子

ヲ付ス

第三十二條 賠償ハ徵發區毎ニ一括シテ府知事縣令郡區

長戸長停車場長船船會社ノ店長ヨリ之ヲ請求ス可シ

第三十三條 徵發物件ノ其使用ノ爲メニ毀損シタルモノ

ハ賠償ス其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ

評價委員ノ評定ニ任ス

其毀損ハ持主若クハ操業者ヨリ速ニ其地ニ在ル陸海軍

官憲若クハ戸長ニ届出ヘシ其届出ハ徵用濟引渡ノ後左

ノ期限ヲ越ニ可カラス若シ其期限ヲ越ヘ又ハ期限内持

主若クハ操業者ニ於テ使用セシトキハ無効トス

一 西洋形船舶 七日間

二 地所 評價委員ノ告示スル時日間

三 其他ノ物件 一日間

第三十四條 第十二條第一項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ其

地市場ノ前三ヶ年間ノ平均價ヲ取り之ヲ定ム其平均價
ノ取り難キモノハ評價委員ノ評定ニ任ス

第三十五條 第十二條第二項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ其
郡區平常ノ賃價トス但物件ト操業者トチ各個ニ分別ノ
徵用シタルルハ其郡區平常ノ雇賃及借賃ニ准メ賠償ス

第三十六條 第十二條第二項ノ徵發ニ係ルモノチ宿泊セ
シメ連日使用スルルキ及ヒ六里以外ノ地ニ於テ使用スル
ルハ第卅二條ノ例ニ拘ハラス賃價ノ半額ヲ前給シ宿泊
食飼ヲ官給ス但此場合ニ於テハ賃價ノ四分ノ一ヲ減ス

第三十七條 第十二條第二項及ヒ第六項ニ掲グルモノチ
買上クルトキハ勿論其他使用ノ都合ニ依リ價格ノ豫定
ヲ要スルトキハ其金額ヲ定メ置ク可シ其金額ニ就キ供
給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定ニ任ス

第三十八條 第十二條第三項ノ徵發ニ係ルモノハ第三十

五條ニ准シテ賠償シ第三十六條ヲ適用ス

第三十九條 第十二條第四項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ陸海軍省ニ於テ之ヲ定ム

第四十條 第十二條第五項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ其地平常ノ代價トス

第四十一條 第十二條第六項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ別ニ命令書アルモノ、外左ノ區別ニ從フ

- 一 出船ノ定時アリテ定路ヲ航スルモノハ平常ノ定賃
- 二 定路ヲ航スルモ特ニ出船時日ヲ命シタルトキハ其乘載量五分ノ三ニ滿チタル以上ハ前項ノ例ニ准ス若シ之ニ滿タサルモ五分ノ三ニ値ル平常ノ定賃
- 三 出船及ヒ航路ノ定メナクシテ定賃ナキモノ又ハ運送ヲ以テ營業トセサルモノ等其賠償金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定額

第四十二條 第二十四條ノ場合ニ於ケル賠償金額ハ操業者平常ノ給料航船實費及ヒ船舶ノ損料トス其損料ハ一月ニ各船舶買入代價六十四分ノ一トス

第四十三條 第二十六條ノ場合ニ於ケル賠償金額ハ操業者ニハ平常ノ給料船舶ニハ第四十二條ノ損料トス但船橋及ヒ舢艫ニ充テタルモノ、賠償金額ハ第四十一條第三項ニ准ズ

第四十四條 第十二條第七項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ別ニ命令書アルモノ、外平常ノ定賃トス

第四十五條 第二十七條ノ場合ニ於ケル賠償金額ハ操業者ニハ平常ノ給料物件ニハ其地平常ノ代價若クハ損料トス其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定ニ任ス

第四十六條 第十二條第八項ノ徵發ニ係ルモノハ其植物

ニ損害ヲ加ヘ又ハ地形ヲ變更シタルトキニ限り賠償ス
其金額ハ評價委員ノ評定ニ任ス

第四十七條 第十二條第九項ノ徵發ニ係ルモノハ其地平
常ノ代價若シハ相當ノ損料ヲ賠償ス

第四十八條 第十三條第一項第三項及ヒ第四項ノ徵發ニ
係ルモノハ其地平常ノ代價若シハ損料ヲ賠償ス其金額
ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定
ニ任ス

第四十九條 第十三條第二項ノ徵發ニ係ルモノハ第三十
五條ニ准シテ賠償シ第三十六條ヲ適用ス

第五十條 第十三條第五項ノ徵發ニ係ルモノハ通常患者
ノ例ニ從フテ賠償ス全ク明渡サシムルトキハ第三十九
條ノ例ニ准ス

第五十一條 徵發ヲ拒ミ或ハ規避シ或ハ漫リニ使役ヲ離

レタルモノ及ヒ之ヲ教唆誘導シタルモノハ一月以上一
年以下ノ輕禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附
加ス

第五十二條 徵發ノ命令ヲ受ケタル府知事縣令郡區長戶
長停車場長船舶會社ノ店長其處置ヲ爲サ、ルモノハ二
月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上百圓以下ノ
罰金ヲ附加ス其懈怠ニ出ルモノハ二十圓以上百圓以下
ノ罰金ニ處ス

第五十三條 徵發書ヲ出スノ權ヲ有スル官憲安ニ徵發書
ヲ出シ又ハ其權ヲ有セサル官憲徵發書ヲ出シタルトキ
ハ一年以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ劓官ヲ附加
ス

●十六年八月第三十一号布告ニテ費用怠納者處分方ヲ定
ム(租稅怠納者處分規程ノ部ニ在リ)